
最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

勝利 g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

【NNコード】

N9452Y

【作者名】

勝利go

【あらすじ】

魔法使いが魔獣使いに滅ぼされてから三百年。名家に生まれたのに魔獣に嫌われる主人公。だが、落ちこぼれと言われていた魔獣使いである主人公が最強の雷獣と契約!? 学院一の優等生の秘密も知っちゃって? いろんな障害を乗り越えて、無事卒業できるのか!? バトル半分、ファンタジー半分です><

一話（前書き）

誤字脱字がありましたら、指摘お願いします。

一話

魔法世界、レグニアア。

魔獸使いを育てるエンティクスト学院。

莊厳な、というより古臭いといったほうがあつてている装飾が施された教室の中、春のぽかぽかとした日差しに当たられて、俺、ロスト・クレイグはまどろみの中にいた。が、横から声がかけられる。

「ロストくん！ 起きなつて！ 授業終わつたよ？」

良く通るアルトボイスだ。

こんな声を出す知り合いは一人しかいない。俺はしぶしぶながらも意識を覚醒させ、首を声の主のほうに向ける。
ふわあ…と大あぐびをしてから、俺は口を開いた。

「なんか用か？ ルイス」

ちょっと垂れ目で人の良い同級生、ルイスは困ったように笑つた。見た目はまるで美少女のようだが、白と青の制服に包まれた体は起伏にえしく、そして何よりついている。

「なんか用かつて言われても、次は実技だから草原まで行かないと
「あー…、ついにこの時がやってきてしまったか…」

俺はルイスの説明に深刻そうな表情を作つて答える。
ほかの生徒にとつてはたいしたことのない授業なのだろうが、俺に

とつては大問題だ。

だが、その理由を説明する前に。

ここ、俺の通つているエンティクスト学院は三百年の歴史を誇る魔獸使いの学院だ。

魔獸使いについての説明をするには少し長くなつてしまつが、歴史の授業の反芻だ。

レグニアアを三五百年前まで支配していたのは、少数の魔法使い達だつた。

強大な力を持つたそいつらは、魔法を使えない者たちを無力民と呼び、差別して圧政を行つていた。

しかし、一人の無力民の学者が、魔獸のすむ世界『エニグマ』への道『ゲート』を開いたことで世界は一変する。

無力民は魔獸と契約し、魔法使いに匹敵する力を手に入れ、自分たちのことを魔獸使いと呼んだ。これが魔獸使いの発祥である。

魔法使いと魔獸使い。力が同じなら勝つのは当然、数の多い魔獸使い。

『聖戦』と呼ばれたこの戦いで、魔法使いのほとんどは死に絶えることとなつたが、魔法使いの王が最後の悪あがきに、己の命をすべて魔力に変換。

魔法生物『ルキア』を世界中に放つてしまつ。

魔獸使いはルキアに対抗するために、ゲートの開いている場所に聖都ルミティアを建国。

魔獸使いを育てる学校『エンティクスト学院』を創つた。

だが、俺はそのエンティクスト学院において、今現在『落ちこぼれ』のレッテルを貼られている。

それは俺の抱えている大問題の結果ともいづべきものなのだ。

「とにかく行こうよ。そのままじゃ遅刻するよ?」

「そうだな

多少焦りの色を顔に浮かべたルイスの提案に俺は言葉と共に首肯した。

俺はルイスと連れ立つて三年グリフォンクラスの教室を出る。それから大きな校舎の西側に建設されている魔獣の飼育施設『草原』へと向かった。

クラスは、『ガーゴイル』『グリフオーン』『グレムリン』の三つ。魔獣と契約するために一年間も一緒に勉強して来たのだが、クラスメイトどもは俺とルイスを置いて先に行ってしまったらしい。薄情なやつらだ。

ルイス…、ルイス・エルンダートは入学式の時に俺の横に座つていったやつで、意外と話が合つためつるんでいる事が多い。ちなみに俺とルイスが十六歳で同じ年だと知つたときは驚いた。

早歩きで校舎の中を歩いていると、ルイスが話しかけてきた。

「そういえば、ロスト君

「あんだけよ？」

「ずっと前から気になつてたんだけど…。その髪と目の色、おじいさん譲りって本当？」

俺の目つきの悪い眼球の色とそれを隠す髪。漆黒の髪に翡翠色の目は、確かにルイスの言うとおり祖父の遺伝である。

だが、それは俺にとってはコンプレックスにしかならないので封殺する。

「んな話より、足動かさねーと本氣で遅刻すんぜ？ あの暴力教師に体罰食らうことになるぞー」

「えー？ 今日の実技担当ってジルマス先生だつたっけ？」

ジルマスとは、一いつ名が体罰の鬼という毛深い筋肉の塊のよつな教師だ。

それに本人の魔獸もゴリラのよつなのだから笑えてくる。

首を縦にこくこくと何度も振つて肯定の意思表示をすると、ルイスの顔が青ざめた。

「僕あの先生苦手なんだよ！」

早歩きから小走り、小走りから全力疾走へ。ルイスは一瞬で移行する

と俺を置いて走り去ってしまった。

俺はその背中を見ながら一言。

「嘘だよ」

短くつぶやく。

今日の実技担当は生徒に甘いフローウェルだったはずだ。

俺は自分のペースを守りながら、悠々と草原へと向かった。

「ひじょうロスト君！ 今日はフローウェル先生じゃないか！」

草原へ授業開始の直前に到達した俺に開口一番、ルイスはそう言つた。

俺は首をかしげながらルイスに言い返す。

「ちゃんと授業担任を確認してないお前が悪い」

「……それはそつだけど」

ルイスは金髪で女のような顔、垂れ目、といつような見た目じおり、気が弱い。

さつきも恐らしく、自分が間違つているかも知れないという不安に駆られたんだろう。

確認してたのにクレイグ君が言い張るから…と反論されたところで「人に流されるお前が悪い」とでも言えれば済む話だ。

悔しそうにしているルイスは放つておいて、俺はクラスメイトの集まっている場所まで歩いていく。

ルイスも後ろからついてきて、俺の横に並んだ。

級友たちが集まっている円の中では、フローウェルが一匹の魔獣を檻から出しているところだった。教師による実演だ。

この学院の実技とは、実際に魔獣と触れ合うこと。

エニグマで自分のパートナーとなる魔獣を見つける前に本物 といつても人の魔獣から生まれたレグニア育ちの魔獣だが と触れ合わせることで、魔獣に対する扱い方などを学ばせようというの

だらう。

そして同時に、俺の抱える大問題とは実技の授業で必ず起じる。

フローウェルの実演が始まる。

魔獸に己の生氣を与え、その魔獸の武器『魔獸外装』^{アーマメント}を召喚する技術。

「まずは魔獸に生氣を流すのです」

そういうつてフローウェルは、赤い毛並みを持った犬のような魔獸『レッドハウンド』の子犬の額に手を当てる。

子犬は気持ちがよさそうにぶんぶんと勢い良く尻尾を振っていた。

「そして次は魔獸に向かつて契約の言葉を唱えるのです。『魔獸外装』^{アーマス}」

フローウェルの言葉を聴いた子犬の体から、光が滲み出して宙に浮かぶ。その光の塊は少しの間ふわふわと漂つていたが、やがて手を包み込むように覆つた。光はどんどん収束していき、フローウェルの指には紅い指輪がはまつていた。

おお……！ と感嘆の言葉が生徒たちの口から漏れる。フローウェルは、指輪を嵌めた手を空にかざした。

「これは魔獸が私から受け取つた生氣を魔獸外装に変換しているのです！ そして、こーんな小さな魔獸の魔獸外装でもこのようないどが出来るのです！」

先生の言葉が終わるか終わらないかのうちに指輪が強く発光、空中に向かつて小さな火の玉が放たれる。

それは宙を少し飛んだかと思つと、ポンッ！ と可愛いらしき音を立てて、空中で破裂した。

フローウェルは立て続けにもう一発、火の玉を空に打ち上げる。先ほどと同じように空中で破裂した花火を見上げながら、フローウエルは右手を高く掲げた。

生徒の視線がフローウェルの右手に集まる。

ピキピキピキッ！ パキヤーン！ と、指輪に亀裂が走り粉々に砕けた。破片は光の霧となつて霧散する。

魔獣に与えた生氣の分の魔力を消費し終えた、といふことなのだろう。

ルイスは俺の隣でなにやら興奮している。大丈夫かコイツ…と内心で心配しているとルイスは急に俺のほうを振り向いた。

「どうした？ ルイス」

「魔獣外装があ…、僕たちにも出来るかなあ…」

「お前はがんばりや何とかなるだろーよ。つーかこの授業二回目だし

「そうだよねえ…、がんばらないと…」

一部分を強調した返しをしてやつているのに、ルイスは目をキラキラさせてフローウェルと子犬を見ている。

俺があきれた視線をルイスにぶつけていると、フローウェルが自分の植物のような魔獣『エスカドス』に命じて、いくつもの檻を持つてこさせていた。

「はい、皆さんには私と同じことをしてもらいます。一人一組になつてください」

そう言われて、俺は右にいるルイスを見る。ルイスも同じことを考えていたようで俺と目が合つた。

お互に頷きあつて一人一組は完成。他のやつらも各自ペアになつてゐる。

ガシャリ！と金属的な音を立ててレッドハウンドの子犬が入った檻が俺たちの目の前にも置かれた。

「それでは檻を開きますので、一人ずつ生氣を『えでください』

その言葉を聞いて、俺はルイスに「先にやれ」と親指を立てて命図。ルイスは苦笑しながら檻に近づくと中から子犬を引っ張り出した。

「まずは生氣の譲渡…だよね？」

ルイスは子犬の背に手を当てるど、口を閉じて生氣を渡し始める。触っている本人はすごく満足げだが、触られている子犬は不満なようだ。尻尾もまったく動いていない。

草原、という開放的な名前を持つてゐるくせに、実態は檻に入れた獸の収容施設と同じで、ルイスも子犬が好きなくせに好きすぎて子犬に引かれるのだ。

このルイスの悩みは俺の抱える問題と似ているが、俺からしてみればうらやましい限りである。

そんなことを考えていつに、必要量の生氣を供給し終わつたのだろう。

ルイスは一度俺と目を合わせてきた。見ていて欲しい、といつことなのだろうか。

「じゃあ、始めるから…」
「がんばれー」

短く激励してやると、ルイスは頷いて目を閉じた。

集中して子犬と意識のやり取りをしてゐるのだろう。第一世代の魔

獣だからこそ契約しなくても魔獣外装が使えるのだが、フローウェルのように簡単に魔獣外装を呼び出せるようになるには相当の修練が必要だ。

十秒間ほど口を閉じてから、ルイスはまぶたを持ち上げる。二、三回深呼吸をしてから、一度大きく息を吸い込んで言葉を発した。

「『魔獣外装』！」

魔獣外装を呼び出した。

子犬の体から光が溢れ出したあと、ルイスの右手に集まって指輪の形となる。

魔獣外装の召喚は成功したようだ。ルイスは興奮した面持ちで俺の方を向いた。

「成功だな」

「うん！　じゃあ次は火を撃つてみるね」

他のペアでも成功した組が何組かいるようだ。空中に向けてぽんぽんと火の玉が放たれている。

ルイスはさつき実演したフロー・ウェルのまねをして、手を上に掲げ、意識を集中させた。

上に上げた右腕の手首を、左手で支える。するとポンッ！　と可愛らしい音がして、火の玉がルイスの手から射出された。

しかし次の瞬間、ボフン！　と火の玉は一メートルほど進んだところで破裂。大きく広がった。

「んな！？」

「うわっ！」

火が俺とルイスの頭上を焼く。

なにしてんだ！ とルイスに文句を言いかけたのだが、悲劇はそれだけでは終わらなかつた。

火の玉が爆ぜた次の瞬間、ルイスの指にはまつていた指輪が閃光を放つて爆碎した。

その光はフローウェルの時とは違い、徐々に消えるのではなく一瞬だけで全ての光を放出。強烈な光が俺の視界を埋め尽くす。これは『失敗』^{ファンブル}という魔獸外装に込められた生氣が光に還つてしまふ現象だ。

「「」、「めん…、失敗しちやつた…」

「失敗しちやつたじやねーよ！ あぶねえだろ？ が馬鹿ルイス！！」

ペコペこと謝つてくるルイスの頭をはたきながら、俺は怒鳴りつけた。
失敗^{ファンブル}の規模によっては魔獸使いも危ないのだが、ルイスの指は無事だつたようだ。

ルイスは恥ずかしそうに頭をかいて子犬を持ち上げると、ずいと俺に突き出してきた。

「じゃあ次は口スト君の番だね？」

「うつ…、いや、やっぱ俺はやめとく…」

「授業だよ？ やめておくとか無理なんじゃない？」

ぐ…、と俺は声を詰まらせた。

ルイスは子犬を俺の一メートルほど前に置いた。

ちゅこん、とお座りをしている子犬に俺は、じりじりと近づいていく。

ぐ。

だが、俺があと一歩程度でたどり着く、という距離で子犬はビクッ

！ と俺のことを見た。俺も動きを止めて、子犬と見つめあつ。

その一秒後、プルプルと震えていた子犬が脱兎の勢いで俺と正反対の方向に駆け出していく。：犬のくせに脱兎の勢いとはどういうことだ。

「おい！ みんな見ろよ！ またロストが逃げられてるぜー。」

クラスのお調子者、ジャックが俺の醜態を指差して笑いやがる。他のクラスメイトどももそれに便乗して笑い声を上げていた。

このグリフオンクラスで俺のことを落ちこぼれと笑わないのはルイスだけである。

エンティクスト学院は一年生の学校だ。最初の一年で魔獣使いの基礎を学び、契約の儀式で自らの魔獣を手に入れた後、一年の研修を経て正式な魔獣使いとして認知されるのだ。

閑話休題。

先ほどレッドハウンドの子犬に逃げられたように、魔獣に徹底的に避けられる。

これが俺の抱えている問題であり、落ちこぼれと言われる原因だ。魔獣使いは魔獣と心を通わせて戦う職業である。

それを育てるエンティクストにおいて魔獣に嫌われる俺は落ちこぼれなのだ。

実家のクレイグ家がルミティア建国の際に力を持った名家なので、その後押しがなければ入学さえ出来なかつただろう。

ため息をつきながら悔しげに他のクラスメイトを見回すと、フロー・ウェルが近づいてきた。

エスカドスが逃げ出した子犬を捕まえている。

「クレイグ君…、相変わらず魔獣には好かれないのですねえ」

呆れたように苦笑いしながらフローウェルが話しかけてきた。
俺は、更に深いため息をついてフローウェルに同意する。

「一年間ずっと嫌われ続けてます…」

実際は生まれたときからなのだが。母親の魔獣すら俺には近づかなかつたという逸話がある。生まられてから十六年間、魔獣と仲良く触れ合った経験は一度しかない。

俺の目と髪の遺伝の元である祖父の魔獣、ブラックドラゴンだけだ。さつきはルイスの質問を受け流したが、伝説の魔獣使いとまで言われた祖父と同じ容姿というのは落ちこぼれにとって相当なコンプレックスになるのだ。

かたや伝説、かたや落ちこぼれ、同じ見た目でもこつまで違うものなのか。

まあ、落ちこぼれとは呼ばれていても、いじめられているわけではないのが救いではあるが。

フローウェルはそんな俺を見て、にこやかに笑った。
薄桃色の髪をなびかせて、一言。

「評価は『^{最低}D』です」

いつもどおりの死刑宣告をしてやがってくれました。

「そんじゃあロストの前期実技五十回連続の評価Dと全研修の終了を祝して、乾杯！」

「「「かんぱーい！」」

「テメエらいつか見返してやるからな…」

食堂で、グリフォンクラスの生徒が打ち上げをしている。集まっているのは四十人ほど、ジャックの俺へのからかいを混ぜた乾杯に合わせて笑っている奴らに、俺は復讐を誓いながら呟いた。

ルイスも隣で笑っている。

「つーかおかしいだろーがお前ら！ なんで俺の評価Dが主体になつてんだよ！」

「それはお前がエンティクスト史上初全五十回の実技をDで通ったからだろ？」

ジャックが楽しそうに笑って、テーブルの上におかれた鶏肉を切り分けて俺の皿によそってきた。俺はそれを貪りながらルイスに話しかける。

「契約の儀つていつだ？」

「あと四日…だつたと思つけど。ペアどうなるか楽しみだね？」

契約の儀が終われば、あとは実習だ。エンティクストにおかれている魔獣使いギルドからクエストを受けて、魔法生物であるルキアを討伐するのだが、その際の保険として一人一組でペアを作るのだ。要するに一人じや死ぬから一人でやれ、という学院側の要求だ。

そこで必要量の単位をとればエントリクスト学院から卒業する」となる。

ルイスの言つペアとは、実技の授業で行う一人一組とは違つて教師が決めるペアのことだ。

一年間で必要量の単位が取得できないと退学扱いになつてしまふので皆ペア分けには必死になるのだが、ルイスはその重要さがわからぬいようだ。

「んなに能天氣なくせに単位取れなかつたら笑つてやるよ」

「笑わなくともいいと思つんだけど…」

「嘆き悲しめど？」

「応援してくれればいいじゃん！」

「はいはい、単位取れなかつたらな」

そんな感じで一時間ほどを過ぎした後、テーブルの上有る料理を一通り皿に盛り付けると、俺は席を立つた。

「クレイグ君、どうしたの？」

ジャックと楽しそうに談笑していた垂れ目で優しそうな女子 名前はレイアだつたはず が話しかけてくる。俺は皿を片手に、レイアに向かつて空いているもう片方の手を上げた

「いや別に。部屋に帰つて食べようかと思つてな」

「えー！ 帰つちやうのー？」

なぜか俺の言葉にレイアとルイスが声をそろえて反応した。
俺は怪訝な顔をして、垂れ目な一人に聞き返す。

「なんか問題あるか？」

「せっかく皆がロスト君の連続Dを祝うためにパーティ開いてくれたのに！」

「そうだよー！ クレイグ君が主役なんだからーー！」

「お前ら俺を笑いたいだけじゃねーのか！？」

息ぴったりに笑顔で人の心傷つけてくる天然コンビにシッコミを入れて、俺は食堂を後にした。

俺が食堂を出て向かった先は、学院の側に建てられている生徒寮だ。パーティを抜けてきたのは別にからかわれた事に気を悪くして、とかの理由ではなく、ただ単純に『契約の儀』という一生に一度あるかないかの大変な試験の勉強をするためだ。

実技の成績が最低な俺は筆記の方で点を稼がないと退学になってしまふため、今でも学年百五十人中で十番くらいには入っているのだ。だが、寮に到着する直前となつてエニグマについて書かれている本は自分の部屋には置いていなかつたことを思い出す。

「……図書館行くか」

幸い図書館は生徒寮の近くにある。すぐに勉強できるよつととい分配慮だらう。

俺は寮の自室に飯を置いて、図書館へと向かつた。

「相変わらず古臭いところだな…」

俺は重い櫻の木で作られたアンティーク調の扉を見て、小さく呟いた。

ギイ…と重い扉を押し開けて中に入る。

蔵書数は十一万冊と多いのか少ないのか良くなきわからぬ数の本が納められた本棚の間を縫うように歩いていき、エニグマ関連の本が収めてある場所へと向かった。

しかし、

「あれ、アイツ…」

先客がいた。それも今まで何人もの優秀な魔獣使いを世に送り出してきたエンティクスト学院で実技と筆記をともに一位をとり続け、史上最も優秀とまで言われる女。

同じグリフォンクラスに在籍しているセレン・アルジエだ。

きれいな顔の中にアメジスト色の瞳を持ち、透き通るような金髪を頭の後ろで結んで、もう十時ごろだといつに、まだ制服を着ている。

俺の目的の本が置かれている側の机の上に、大量の本を積み上げて何やら勉強をしている風だった。

だが、俺には関係ない。そう思つてアルジエの後ろの本棚に足を運ぶが、そこで俺は絶句する羽目になる。

なぜなら、俺が目的としていたエニグマ関連の本の部分だけが、本棚からごつそりと抜き取られていたからだ。俺はゆっくりと首を動かしてアルジエの机の上に置かれている本の山を確認する。

『エニグマノ全テ』『エニグマとは』『魔獣大全』エニグマ編』『契約の儀』『魔獣の扱い方』『魔獣外装解説』『エニグマ地理』etc…。

俺が借りようと思っていたエニグマ関係の本、その全てがそこにあつた。

「…………おい、アルジエ」

声に微かな怒氣を孕ませて、俺は目の前にいる優等生の名を呼んだ。だが、アルジエは気付いてないかのようにカリカリと羽ペンを動かし続けている。

俺は深いため息をつくと、わざよりも大きい声でもう一度話しかけた。

「あのよー、ちょっとといいか?」

だが、アルジエは全く反応しない。

「おい、セレン・アルジエ! ! !

その態度にイラついて三回目は話しかけるだけではなく、金髪の横に移動して、ダン! と机を叩いた。

それでやっと気付いたかのように、アルジエは顔を上げると俺にアメジストのような瞳を向ける。

細い眉に大きな二重の瞳、鼻筋もよく通っていて、桃色の唇はふつくらとしているその顔に俺は図らずも一瞬だけ見とれてしまう。肌もキメ細やかですべすべしてそうだ。

「なに?」

アルジエは短く聞き返してきた。その視線で、勉強の邪魔をするなと暗に訴えてきている。

ここで、アルジエが氣の強い自己中心的な女だと俺はようやく思い出した。

成績は良く、顔もいいのに、誰も寄せ付けない性格のせいでいつも一人のこの女のあだ名は確か『氷姫』。ようやく反応してくれた氷姫様に俺は文句をつけた。

「一人でそんなに本を持ち出すのは Bieber かと思つんだが」

「だからなに？」

「図書館の利用規定にもあんだけ？ 一度に持り出せる本は二冊までって」

「HIE はまだ図書館の中、問題あるの？」

「は…？」

「だから、持ち出し規定は図書館外に持り出す場合。私は別に違反してない」

声色を全く変えずに淡々と喋りきるアルジェ。

このままでは本を一冊も借りられそうにないので、俺は方法を変えることにした。

「お前の言い分は分かった。一つ質問なんだが、今勉強してんだよな？」

「そうだけど」

「なら、終わつたやつあるだろ？ 僕も勉強したいから貸してくれ」

頭を下げた俺を、アルジェはまっすぐに見据える。

急に見つめられパチパチと瞬きをする俺に、アルジェは本の山から一冊取り出して俺の前に置いた。

「これ、私は読んだし… 分かりやすかつたから」

「え？」

あの氷姫がこんなに聞き分けがいいとは思わなかつたため、間抜けな声で聞き返した俺だが、アルジェは再び羽ペンを持つと勉強を開いてしまつた。

俺の前に置かれた本を手にとつて見ると、背表紙には『HIE グマ地理』『契約の極意』と書かれている。

「今まで全く話さなかつたけど、意外といい奴なんだな。ありがとう
「ツー？」

俺が礼を言つと、アルジエの背がピクリと動いた。だが、特に返事をされる気もしなかつたので、俺は本を抱えながら図書館を後にした。

だが、俺に礼を言われたアルジエが一瞬動きを止めたのはなぜだろうか。心なしか頬も赤くなつていたような気がする。首をひねりながら、俺は自室へと急いだ。

寮の玄関を通り、グリフオンクラスの男子居住区に戻ると、まずパティからくすねてきた料理をすぐにたいらげ、氷姫推薦の本を広げた。

最初は『エニグマ地理』からだ。

今日から契約の儀までは授業はない。契約の儀とは、よく体を休め、予習をし、万全の体制で臨むべきもの。そういう考えがエンティクストでは標準なのだ。

そう考えると聖戦の時の魔獣使いたちはすごいと思う。ぶつけ一番でエニグマまで行つてパートナーとなる魔獣と契約してきたのだから。

頭の片隅で思考しながら、俺は本の中身を頭に叩き込んでいく。まずはエニグマ全体の大まかな地理を、その次は各場所に生息する魔獣を。

本一冊の内容はかなりのもので、それらを全て覚え切つたころにはもう口にちが変わってから一時間が経つていた。

ルイスたちは食堂で眠ってしまったのだ。帰ってきた気配はない。

「…もうこんな時間か。…………はあ……」

俺は壁にかけられた時計を見ながらため息をつく。
本を一冊覚えるのにこんなに時間がかかるとは思わなかつた。だが、
アルジエはこの本を読んだと言つていた。

今日は実技があつたから図書館にこもつていたのは長くても九時間
くらいだらう。それであの本の山を築いたというのなら流石といつ
他にない。

俺は眠気を吹き飛ばすよつに両頬をペチャペチと叩くと、『契約の極
意』を手に取つた。

本のタイトルからして契約を成功させるために必要なことが書かれ
ているはず。

俺は表紙をめくる。

そして、それを読み終わつたときにはすでに朝日が昇つていた。

四話（前書き）

誤字脱字がありましたら、「指摘お願いします」へへ

結局一睡もせずに夜を明かした俺は、談話室で椅子の背もたれに体を預けている。

すると、寮の入り口の扉が開き、グリフォンクラスの居住区にたくさんの生徒がなだれ込んできた。

俺は驚いたが、そいつらの顔をみて苦笑いする。

昨日、食堂で騒いでいた奴らだったからだ。どうせ皆さうして眠つてしまい、朝の清掃に来た使用人に追い出されたのだ。

「おはよー、ロスト君…」

徹夜明けで眠さを感じなくなっている俺に、死人の集まりのようなグループから出てきたルイスが話しかけてきた。ふらふらと足元もおぼつかない。

俺は立ち上がると倒れそうになつたルイスを支えて、さつきまで俺が座つていた椅子に座らせた。

「ああ、おはよう。みんな揃つて昨日は何をしてたんだ？」

「えつと…、ジャック君がお酒の飲み比べしよーって…」

「理解した。よくがんばったな」

ジャックが全ての諸悪の根源なのだろう。

この前もそうだったのだ。こいつがどこから酒をくすねてきて皆に振舞つたのだ。皆が酔いつぶれるまで呑ませるくせに自分はどれだけ呑んでも酔わないのだから性質がわるい。

下手すれば酔いつぶれたあとも無理やり口に酒を注ぎこむのだ。

もう一度、死人グループを良く見てみると、ジャックだけは元気そ

うしてこる。

「ジャック。ちょっとこっち来い」

「？ なんだよロス、ぶおつ！！？」

のこのこと近づいてきた馬鹿の鳩尾を蹴り上げて吹き飛ばしてから、俺は談話室の端にある水差しからコップに水を注ぐと、それをルイスに差し出した。

「ほり、飲め」

「うう…、ありがと…、ううふ…！」

「吐くならトイレに行け！」

吐きそうになつたルイスだが、なんとか堪えたようだ。

ゼーはーと息を荒くするルイスの背中を擦りながら予定を告げる。

「俺、図書館に本返してくるから

「うそ…、いつらうしゃい…」

自室から『Hニグマ地理』『契約の極意』を手に取り、まだ肌寒い季節なので、薄いが保温性の高い黒のロングコートを制服の上から羽織る。

クレイグ家の衣装棚に入っていたものなので結構な値打ち物だということは分かるが、他にもつと高価そうのが並べられていたので持つってしまった。

ロングコートのポケットに本を無造作に突っ込んでから、俺は図書館へ向かった。

昨日の夜と同じように本棚の隙間を縫つて、エニグマ関連の本が納められている場所へ向かう。

が、そこで今日一度田のため息をついた。

「ひとなところで寝てるのかよ」

氷姫ことアルジェが、机の上に突っ伏してすやすやと眠っていたのだ。しかも本の山が昨日の一倍くらいの高さになつてこる。とりあえず、ロングコートから本を取り出して本棚にしまつと、熟睡しているアルジェを起こさないよう一本の山も片付けた。

同じグリフオンクラスだからな、別に寝顔が可愛かったからじゃないぞ！ と心中で自分に言い訳をする。

「へしゃん！」

「うおー？」

アルジHのへしゃみに少し驚く俺。

いかに氷姫とはいえ、こんな暖炉もない図書館で寝ていたら風邪をひくだろう。

着ていたロングコートをぬぐと、ふあさり…とアルジェにかけてやる。この恥ずかしい行為も俺がアルジェにコートを返せと言わなければ間に葬られるはずだ。

「（本を貸してくれた礼だ…。意外とためになつたしな）」

ひそひそと囁いて自虐的な笑みを浮かべる。

子供のように眠るアルジェだが、こんな優等生と落ちこぼれがもう関わることもないだろ？

俺はもう一度だけ氷姫…「いやつて寝てこるところだけ見ると眠り

姫のようなアルジェの寝顔をちらりと見ると、寝なおすために寮へ

と戻った。

「あー…、ロストくん…」

「まだ一日酔いなのかよ…。俺はもう寝るから夜になつたら起こしてくれ」

いまだに死人の雰囲気を醸し出しているルイスに呆れた視線を向けると、俺は談話室のテーブルからクッキーを幾つか持つて自室への階段を上る。

ポリポリとクッキーを全て胃に収めると、俺はベッドに倒れこんだ。今まで全く無かつた眠気が急にまぶたを重くする。

ふつん…と、糸が切れるように、俺は眠りの世界へと旅立つた。

「ロスト君、ロスト君！」

「くあ…ルイスか？」

俺は体を揺すられて起き上がると、大あくびをしてから自分を起こした人間の名を呼んだ。

一日酔いが治つた氣の良いクラスメイトは困つたように笑うと、俺の前に黒い布のカタマリのようなものを差し出してくる。

俺は訝しげにそれを眺めるが、次の瞬間。

「おわあ！？ 何でこれが！」『……？』

ルイスが持っていたのは綺麗にたたまれた黒いロングコート。そう、俺がアルジェの肩にかけてやつたはずの、あのロングコートだ。それをルイスが持っているということは……。駄目だ、脳がその先を想像することを拒否している。

「アルジェさんからロスト君に返してくれって言われ
「黙れコラア！！！」

ベチンッ！ と俺が想像したくなかった事実を一瞬で口にしゃがった馬鹿の脳天を思いつきりはたくと、俺はロングコートを布団の下に突っ込んだ。

だが息を荒ぐする俺に、ルイスは更に追撃を開始する。

「いやあ、でも僕おどろいちやつたな。まさかロスト君がアルジェさんとあんな仲だつたなんて」

「あんな仲つてなんだ！？」

「え？ あのロスト君が自分の着てるものを優しく差し出すような関係だよ？」

「誤解！！ つーか今田一田の記憶を全て失え！！！」

「男子寮の談話室にまで来てたから、皆もおどろいてたよ～」

「あいつらも見てたのか！？」

「今まで教室でも誰とも話さなかつたあの氷姫様をいつのまに落としたんだよ！ つてジャックくんが怒つてた。でも本当にいつ仲良くなつたの？ あのアルジェさんと

「落としてねえよ！ だいたい怒られる筋合いもねーし！ 仲良くもなつてない！」

「まあ、いいや！ そろそろ食堂に行かないといじ飯なくなつちやうよ？」

「…………最初の間はなんなんだ」

いつもおとなしいルイスがこんなに過敏に反応していくとは思わなかつた。

「どうかアルジエはなんでロングコートが俺のだと分かつたんだろう。

うーむ……と、本氣で悩み始めた俺にルイスがポケットから何かを取り出して俺に差し出してきた。

「手紙？」

「うん。アルジエさんがロスト君に渡してくれって。あ！ もちろん中身は見てないよ？」

「見てたら殺してる」

怪訝な顔をして俺は手紙を受け取った。白い封筒で、その厚みからして中身は一枚だらう。

俺はそれをどうするべきか少し逡巡した後、

「ルイス、ワリイんだけど俺の飯取つてきてくれないか？ お前が飯食つた後でいいから」

食堂には行かないで手紙を読むことにする。

中身が気になるし、何より食堂に行つてジャックにでも会つたらアルジエとの関係について一晩中追求されかねない。まあ、あいつらの思つてることは全て誤解なのだが。

そんな俺の胸中を理解してくれたのか、ルイスは快く頷いてくれた。

「分かった。じゃあ一時間くらいでまたロスト君の部屋に来るから」

「ああ、頼む」

「『』のお皿も持つていいくね？」

そう言つてルイスは昨日の夕食を乗せていた皿を持って部屋から出て行つてくれた。

俺は、足音が聞こえなくなるのを確認してから、手に持つた手紙に視線を落とす。

蝶で封をしてある。くるりと裏返すと綺麗な文字で「セレン・アルジエ」と綴られてあった。

「ラブレター……？　いやでもあの氷姫がなんことするわけねーか…」

一瞬だけ思春期特有の淡い期待を抱いてしまつた俺だが、すぐに「それは無いな」と首を振つた。あの氷姫がそんな可愛らしいことなんかした田には、空からファイアーボールが降つてくるのかと思つてしまつ。

俺は部屋の机の引き出しを開けると、中からペーパーナイフを取り出した。

それをスッ…と蝶の下に滑りせて封を切ると、「クリ…と唾液を飲み込んでから便箋を開く。

俺は恐る恐る便箋に田を通し始めた。

ロスト・クレイグ

「こきなり呼び捨てかよ…、まあいいけど

外套を貸してくれたことと、本を仕舞ってくれたこと感謝する

「…それだけかよっ！？」

書かれていたことはそれだけである。俺は脱力してベッドの上に倒れこんだ。

そして思いの外、自分が手紙に期待していたことに気付き失笑する。だが、ベッドの上でもう一度頭上に便箋を掲げたとき、その右隅に何かが小さく書かれているのを見つけた。

…一応言つておく。ありがとつ

ガバッ！ と俺は勢い良くベッドから起き上がりつてもう一度文面を確認するがその言葉は消えなかつた。

俺は、あの氷姫でもお礼とか言うんだなーと地味に驚いたが、手紙をもう一度封筒に仕舞うと、引き出しの奥に入れておく。

おそらくこの学院で初めてアルジエから手紙をもらつたのだ。そのくらいしても罰は当たるまい。

いつのまにか無意識にニヤついてしまつたが、俺は気を取り直すと時計を見る。

「まだルイスが帰つてくるまで四十分くらいあるな…」

仕方がないから図書館で物語でも借りてしよう。そう思つて俺は自室を出た。

この時、俺がロングコートを羽織つた理由はなんとなくである。決して、やましい気持ちなどではない。…ほんとだぞ！？

もちろん、図書館に「アルジエがいる」ということは無かつた。…少し期待していたけど。

四話（後書き）

感想など書いてくれると嬉しいです。^-^

「あのや…リク」

『なんだ?』

黒い髪と翡翠色の瞳を持つ一人の魔獣使いが、隣にいる巨大な獅子に話しかけた。

はあ…と魔獣使いの青年はため息をつく。

「魔法使い五千人と魔獣使い一十万人の戦争でさ…、なんで俺一人で三千人を相手にしなくちゃいけないんだ?」

『百倍の数じやねーと勝てねえって思つたんだろ?』

獅子が呆れたように答える。

青年と魔獣の目の前には大きな扉があった。扉の奥には魔道王との側近が率いる三千人の魔法使いが待ち受けているだろ。青年は更に嘆きながら獅子の体に手を当てる。

「大体…まだ魔獣使いは弱すぎだよな…。魔法使いに反乱起こせるレベルじゃないってのに焦りやがつて…。俺がいないと話にもならないじゃねーか」

『…そろそろ乗り込まないと二千人が帰つてくるぜ?』

「これ以上増えられてたまるかッ! リク! 『魔獣外装』!」

半ばキレ気味に青年が叫ぶと獅子の体から光が滲み出し、青年の右手に収束して一本の刀が生み出された。

白銀の刀身に金色の模様が刻み込まれた美しい刀を青年は上段に構えると、扉に向かつて無造作に振る。

次の瞬間。バチイツ!! と刀から生み出された雷が扉を吹き飛ば

した。

青年は獅子の背に飛び乗ると、刀を握る手に力を入れる。チヂヂヂ
チヂッ！ と紫電の光が刀身に走りスパークした。

『盾はいらぬーのか?』

「お前が防いでくれるって信じてるよ。『最強の雷獣』さん」

『ケハハ！ 伍世ろ『始まりの魔獸使い』！』

獅子の笑い声が空気を震わせた。獅子の後ろ足の筋肉が力を溜めて爆発的な加速を生み出す。扉を潜り抜けると奥は更地になつてあり、その青年一人を倒すために砦の一つをつぶしたことが察しられた。三千人の魔法使いが半円状に青年と獅子を囲む。

「ご、青年はそれ二意二義を見せない。二二は師二も同義二」

たが、青年はそれは臆した様子を見せない。それは獅子も同様で止まるどころか更に加速して魔法使いの群れに突っ込んでいく。

「奴をここに仕留めねば我らの負けだ！」第一陣！放て！」

指揮官らしき敵の男が空に炎球を撃つ的同时、千人ほどの魔法使いが一斉に攻撃魔法を打ち放つ。七色の光の奔流と見紛うばかりの様々な攻撃魔法は青年と獅子を粉微塵に変える　はずだった。

『邪魔だア！』

獅子が吼える。契約者の青年以外にはただの鳴き声にしか聞こえない咆哮だが、それは恐怖を抱かせるには十分であつた。

《迎雷壁》

「バチチチ！」と獅子の体から電撃が溢れ出し、全ての攻撃魔法を迎撃した。光が幾つも炸裂し、辺り一面を埋め尽くす。

青年の視界も光が覆つたが、それに構わず青年は刀を横一文字に難いだ。ヂチイツ！ 刀から雷が迸り、正面にいた魔法使いを一度に百人ほど消し炭に変える。

「まずは百人か…」

だが、青年の攻撃はそれだけでは終わらなかつた。

刀を振り切つた体勢から、今度は雷を纏つた斬撃波を他の集団に叩き込む。空を切り裂いて飛んだ斬撃波は地面に着弾すると同時に雷の嵐を撒き散らし、着弾地点から周囲五十メートルほどの魔法使い全てを焼き尽くした。

「五百は逝つたかな？ これで

『六百！ 残りは二千四百！』

獅子は口を大きく開くと太い雷の矢を飛ばす。

狙いは周囲一面更地となつてゐる中で唯一の高台。おそらくは魔道王がいる場所。

だが、どんな矢よりも速く雷速で飛んだその雷矢は、高台にぶち当たる直前に焼き消える。

それに獅子が驚愕の色を交えて呟いた。

『…オレの雷閃が消されたぞ？』

「多分魔道王の『シークストラ左腕』だよ。もともと天才的に魔術の腕があるくせにその容量を全部防御に割り振つた変わり者」

攻撃魔法は一切使えないけどな…と呟きながら魔法使いを消し飛ばし続け、青年は高台に目を向ける。

接近戦が得意ではない魔法使いが人海戦術を使つ時点で負けは決まつてゐるようなものだ。

ただ、『左腕』^{シニストラ}の対となる攻撃魔法のエキスパート『右腕』^{デクストラ}に限つてそれは当てはまらないが。

獅子が魔法使いの集団に突つ込み、青年が消し飛ばす。それを三分ほど続けると魔法使いの数は千人ほどになっていた。

「残りは千か…」

『さつさと終わらせよーぜ!』

「ああ、そうだな!」

青年は獅子の言葉に合わせて、刀に纏わせる雷の量を十倍以上にする。残りの魔法使いは散り散りになつてゐるため、その半分に照準を合わせ、刀に残つた雷の力を五百等分して解き放つ。

刀から五百条の雷光が轟音とともに溢れ出し、五百人を一瞬で焼き殺した。

だが、力を全て解放した刀は砕け散つて光と消える。

「魔道王がさつさと出てくれれば楽なんだけど
「お前如きに王が出るまでもない」

「！ リク！」

青年が呟くのに獅子が反応するより速く、青年の後ろでそれに答える者がいた。

すぐさま刀を再構築するが、背後の襲撃者のほうが一瞬早い。爆風が青年を獅子の上から弾き飛ばす。

その後、襲撃者は獅子にも攻撃を加えようとするが、獅子が体から全方位に放電したため慌てて飛び退る。

青年は空中でバランスをとつてうまく着地し、襲撃者と向き直つた。

「…へえ、驚いた。『右腕』^{デクストラ}って女だったのか」

青年の前にいたのは全身を黒布で包んだ背の高い女性だった。

獅子は青年の側に近づき、青年は獅子の背に飛び乗る。

驚いたと言いながらまるで驚いている素振りを見せない青年に、右腕ストラは忌々しげに舌打ちした。

「よくも、高貴なる我が同胞の半数を…屠ってくれたな！」

「高貴？ それなら何故下賤なる血の平民に、いつも好きにやられるんですか？」

「黙れ！！ 魔道王の右腕エルド・マギクス・イレイナス！ 参る

…」

「…一二一ード・クレイグ」

『マギクス・デイマー始まりの魔獸使い』 & 『アストラ・リクス最強の雷獸』 VS 『マギクス・デクストラ魔道王の右腕』

三百年後には歴史の影に埋もれてしまつ戦いが、今始まつた。

轟マギクス！！ と巨大な炎球を『魔道王の右腕』エルドは『始まりの魔獸使い』一二一ードに叩き込もうとする。

だが、一二一ードは刀の一振りで炎球を吹き飛ばした。

返す刀で、エルドに雷撃波を飛ばすが、エルドは落ち着いて回避する。しかし、『アストラ・リクス最強の雷獸』、通称リクが高速でエルドの背後に回りこむと、その巨大な前足の爪を振るつた。

しかし、エルドもさることながら、炎の盾を生み出して爪を受け止める。

《あつちいー》

たまらず、リクは爪を引っ込める。

エルドはリクがひるんだ一瞬の隙を見逃さなかつた。

刹那の間に空を埋め尽くすほどどの様々な攻撃魔法を生み出し、それを一点に収束させる。

「『ロングィヌス神殺し』！」

全ての属性を無理なく統合させたその槍の色は漆黒。神すら無に帰す混沌の象徴だ。

エルドは躊躇なくそれをニードに撃つた。

『ヤベ！ もっと生氣をよこせ！』
「わかつてゐ！」

焦りながらも、リクは自らの最強の盾をニードに持たせる。そして、リクの体からあふれた光が盾の形を取ると同時に。

カツツツツツツツツ！ ！ ！ ！ と凄まじい轟音が周囲に響いた。

盾は『ロングィヌス神殺し』の力を受け止めるのではなく受け流す。

『ロングィヌス神殺し』と盾が衝突した瞬間。ニードの周囲三メートルほどを覗いて辺り一帯が消し飛んだ。

「今まで四百人くらい死んだけど……」

「栄光への礎だ！」

「……ずいぶんな言い草だな」

盾に渡していく生氣を全て刀に移動させる。能力を発生させるための生氣は有限だが、同じ魔獸から生み出された魔獸外装ではその譲渡ができる。

ヂツヂツヂツヂツ！ ！ と刀の周囲を走る紫電が規則的に明滅する。ニードはそれを大上段に振りかぶると、全ての力を一撃に込めた。魔獸外装と呼ばれる武器は込められた力を使い切れば碎けてしまう

が、命を削れば生氣は生み出せる。

普通の魔法使い千人ならば一瞬で塵も残さず消し飛ばせるほどの力を、ニードはエルドではなく、魔道王のいる高台に向けた。

「な!? やめろ!!」

「『雷王の裁き』……」

エルドが焦った声を出すものの、ニードはためらわずに刀を振り切った。刀は碎けたが、キュアッ！ と凝縮された一撃が高台に向かい、ニードの予想通り『左腕』の障壁がそれを受け止める。が、リクの雷矢すらかき消した障壁も、『雷王の裁き』は受け止めるだけで精一杯だったようだ。

バキヤンッ！ と障壁が砕け散る。

「リク！ 走れ！」

《オオ！》

「待て！」

リクが矢のように駆け出す。

エルドは魔力を『神殺し』^{ロングヌス}に全て喰われ声を上げるしかできない。ザツ……と、ニードは高台の上に降り立つた。

「…」ううことか

結論から言つと、高台の上にいたのは一人。

一人はベッドの上に横たわる瀕死の老人。もう一人は、その脇で倒れている白い布で全身を覆つた女性だ。こちらは死んでいるだろう。それを見て、ニードは全てを悟る。

ただの魔法障壁で『雷王の裁き』^{ジャッジメント}が受け止められるはずがない。

その命を魔力に変換した最後の砦だったのだ。

瀕死の老人、おそらくは魔道王が咳き込みながら体を起こした。

「ゴホゴホッ…！ エルドは…どうした？」

「殺してはない。魔力は切れてるみたいだけど」

「そうか…。礼を言ひ」

「なんでだ？」

「エドラは私のために死んでしまった。エルドまで死ぬことはない」

「…俺はお前を殺す」

「わかつている…。だが…、その前にやるべきことがある…」

老人…魔道王は一喝すると、自らの胸に短剣を突き立てた。紋章が短剣の柄から現れ、光り始める。

ニードは止めようかと一瞬逡巡したが、世界を収めていた魔道王が成す最後の仕事だと思い、高台からエルドの元へ戻った。

「魔道王は死ぬなって言つてたよ」

「……糞ツ！」

悪態をつきながら涙を流すエルドに、ニードは言ひ。

「逃げなよ、今生き残つてる魔法使いは生かしておくから」
「…感謝する」

エルドは、一度だけ頭を下げるが、他の魔法使いとともに去つていった。

ニードは、リク以外には死体しかいない場所で、ポツリと呟く。

「こんな殺人鬼に、感謝なんかするなよ」

『なんか言つたか?』

「なんでもない。行こうか、リク」

『ああ! うまい飯が待ってる!』

「食べ過ぎるなよ?」

黒い髪と翡翠色の瞳を持った青年が魔道王の死に際を見届けて六十年

魔獸家の育成に力を入れる名門、クレイグ家を作り、ニードは息を引き取つた。しかし、主人が死ねばその魔獸も死ぬはずだが、リクと呼ばれる獅子はニードが死ぬ前にどこかへ消えたという。

閑話 聖戦（後書き）

零話、だつたものを閑話として投稿しました汗

すみません汗

五話（前書き）

誤字脱字がありましたら、指摘お願いします

俺はグリフォンクラスの男子どもからアルジェについての追及を逃れながらも三日間を過ごし、やっと契約の儀の当田を迎えた。

「朝の九時半にゲート前の大広間に集合。今九時なんだけど、ルイスー！？ まだか！？」

俺はルイスの部屋の前でドンドンと乱暴にドアをノックしながら、声をかける。

「『めんねー！？ あと三分だけ待つて～！』
「急げよ？ 今日遅刻したら退学だぞ？」
「わかつてるつて～！」

『契約の儀』は普段の授業とは違つて、特別な理由が無い限り時間厳守だ。遅れでもしたら即退学。欠席なんてもつてのほかである。それなのにルイスときたら何故か部屋に閉じこもつて何かを用意している。

早いものなら一時間前に大広間に向かっているはずだ。だが、ルイスが「待つてて」と言つてから一分ほどで、

「『めんー！』
「つおー！？」

ピンボーゆすりしながらルイスの部屋のドアに背中を預けていると、

いきなりガチャリとドアが引かれ、俺はバランスを崩してじりもちをついた。

イタタ…と口の尻を擦りながら、ルイスを恨めしげな視線で見上げる。

「何しやがる…」

「『』、『』めん。まさかドアによっかかるてるなんて思わなかつたら…」

「つたく…三分つて言つたのはお前だろ？」「…」

「あ、あはは。それより早く行かないと…」

「つーかお前何を用意してたんだよ？」

「うん、着替えてただけだよ。寝坊しちゃつて」

俺もルイスも制服を着ているが、ルイスの制服は白い下地に青のラインが入ったブレザーというもので特に変化が見られない。生徒によっては制服にプロテクターをつける奴もいるからルイスもその類だと思ったのだ。

契約の儀で契約を成功させるにはエニグマで魔獣に生氣直接受け渡さないといけない。ルイスのような身体能力のそう高くない者は、契約したい魔獣の戦闘力が高いと暴れられたときに怪我するからつけることが多いのだ。

話をそらそととしたルイスに不思議に思つて質問したが、軽く受け流されてしまった。

だが、こんな話をして遅刻で退学とかになつたらシャレにならない。

「まあ、いいけどよ。んじゃそつと行くぞ？」

「うん。」

エニグマに通じる道『ゲート』が設置されている講堂『大空』。

俺はルイスを伴つて、『契約の儀』開始の十分前に大空に到着した。中ではすでに百五十人ほどの生徒が、契約の儀を今か今かと待ち構えている。俺はゲートを中心として半円状に広がっている生徒の後ろに紛れ込んだ。

「間に合つたみたいだな？」

「うん。大丈夫だったでしょ？」

「威張るな。全員二十分前には来てんだよ」

なぜか胸を張るルイスに冷静なツッコミをしていると、ゲートの門が設置されている壇上に初老の男性が現れた。

粗野な風貌に白髪と短い無精ひげ。まるで歴戦の老戦士のようだが、れつきとしたエンティクスト学院の学院長であるヴァレイグだ。側にはヴァレイグの魔獸である氷狼『フェンリル』が付き従つている。

ヴァレイグは壇上の中央まで歩み寄ると、生徒をぐるりと見回した。そして、口を開く。

「ついに…この日が来た」

ただ、普通に喋っているだけ。

しかし、伝説の氷狼を従える魔獸使いが放つプレッシャーは少しざわめいていた生徒たちを黙らせるだけの迫力があつた。シン…と講堂が一瞬で静まり返る。

「人には各々、短い人生の中でやらねばならないことがある。そして、それを成すための助けとして、一生を共にする魔獣と契約するのだ。それを…忘れぬようこしろ」

「…………はい！」

威厳たっぷり学院長の言葉に、エンティクストの生徒が全員いや、俺を除く全員が元気良く答えた。まあ、氷姫なんて渾名をつけられているアルジエが返事していたかはわからないが。学院長は満足げに頷くと言葉を続けた。

「それでは…契約の儀を開始する。各自順番にゲートをくぐり、エニグマへ向かえ。魔獣との契約が完了すれば自動的にこちらに送り返されるから心配はいらん。それと契約の儀以降のペアについては追つて通達するのでそれを待つよつて」

それだけ言つと、氷狼とともに壇上から降りていく、ヴァレイグ。俺は横でなぜか胸を押さえているルイスに声をかけた。

「順番どーなるんだ？」
「うーん…。最後のほうになっちゃうかもねえ…」
「お前が準備に時間かけたからだな」
「つ…！ ひどいよロスト君！ そんな皮肉言つことないじゃないか！」
「事実だろ？」

笑い混じりに会話を続けていると、最初の一人が門の奥にあつてゲートをくぐつてエニグマへと向かつていった。
そいつがくぐると同時に、ゲートは強く発光してエニグマへの旅行者を送りだす。
それを横目で見ながらルイスが一言。

「瞬間^{テレポート}移動みたい……」

聞きなれない言葉を口にしたルイスに、俺は怪訝な顔をする。

「てれぼーと？」

「な、なんでもないよ。それより楽しみだな、どんな魔獣と契約するのかな……？」

完璧に話をそらそうとしたルイスに違和感を覚えたものの、ルイスのその後に言った、どんな魔獣と契約するのかな、という言葉が、違和感を不安で塗りつぶした。

なにせ俺は実技の全てで評価Dを宣告された『落ちこぼれ』である。魔獣と契約するためにはエニグマで素手から直接生氣を流し込まなければならぬのだが、近寄っただけで逃げられてしまう俺はどうすればいいのか。

真剣に頭を悩ませ始めたが、誰かが俺の手を引っ張ったので我に返る。

「ロスト君？」

「……ああ、悪い。ちょっと自分の暗黒の未来を想像しちまたんだ……」

「暗黒の！？ 大丈夫だつて、学院長も言つてたでしょ？ 人生でやらなくちゃいけないことのために魔獣と契約するんだつて。だからこそ才能なくともきっと契約できるよ……」

「…………お前心を的確にえぐつてくるよな……」

そんな感じで会話を続けること一十分。

「やつと順番が回ってきたな」

「ロスト君…先にいく?」

「んじやあ遠慮なく」

俺は背後のルイスに手を振って、壇上に上がると皿の前のゲートに足を踏み入れた。

光の壁のようなゲートに突っ込んでいくのはそれなりの恐怖を伴うが、勇気を出して足を前に出す。ズブリとゲートに体が飲み込まれていき、ついに一歩踏み出すと、体全体が潜り抜ける。

白に埋めぬかれたゲートのなかを、俺は大またでズンズン進んでいく。

だが、歩き続けて三十秒ほどで急に視界が白から変化した。大きな建物がある、そう感じた次の瞬間。

「え?」

「さッ!」と俺は重力にしたがつて頭から地面に落下した。どうやらゲートの出口が空中にあつたらしい。頭を擦りながら空に目を向けると、光の渦のようなものが浮かび、それはだんだんと小さくなつて消えていった。

「…なんでゲートの出口があんな所に…」

俺は恨めしげに咳くと、きょきょきと周囲の様子を確認する。まず、一番に目を引くのが目の前にある大きな…神殿のような建物だ。いや、神殿と呼ぶのはお粗末かもしない。

だが、半透明の黄色い石柱が等間隔で一直線に並び、その上を石版のようなもので覆つてあるため、一応は道に見えるものが奥まで続いている。

次に俺は視線をその上、空へと向けた。

「…………おつかしいなあ」「

空の全てを いや、かなり遠くのほうは晴れているので語弊があるが 暗雲が覆い、雨は降っていないが雷が何度も落ちている。「エニグマの天候は基本的に晴れ」と『エニグマ地理』に書かれていたので俺は首をかしげた。

首をかしげながらも、俺は首を下に向ける。

「…………」

風が吹くと砂塵が舞う。乾いた茶色の大地の所々を灰色の石が彩つていた。

それを見て、今度は絶句する俺。

『エニグマ地理』ではなく、もつ一冊の本『契約の極意』に書かれていた一節と、この光景が俺の頭の中で合致したのだ。

荒野にあつて命の気配は無く、天は稻妻の光のみ、雷の結晶で作られた社は、禍々しき雷獸の戒め。雷の化身の四肢を鎖で封ず、其は

「黄色い建物…荒野…雨雲…雷…。まさか…『雷獸の牢獄』…？」

其は『雷獸の牢獄』なり！

俺がゲートをくぐつて着いた場所。

そこは…強大な力を持つ魔獣、七神獣の中でも最強と謳われた雷の
神獣『雷獅子』が封じられていた場所だつた
！

「雷獣の牢獄…か。なんか変な場所に来ちまつたけど…、どうするか…」

がつくりと肩を落としながら、俺はため息とともに呟いた。
なぜなら、ここ『雷獣の牢獄』に封じられていたはずの神獣は、すでに俺の先祖であるニード・クレイグが契約しているからだ。
『雷獣子』含め、学院長の『氷狼』などが分類される神獣種はエニグマにも一体ずつしかいな超希少種だ。

魔獣は契約主が死ねば己も死ぬ。ということは、ニード・クレイグが死んだときに雷獣子も死んでいるはずなのである。
そして、神獣がいる土地に他の魔獣は一切近づかない。
以上のことから…、この近くに魔獣はない、ということが推測されるのだ。

「…俺がここに飛ばされたのにはなんか意味があるはずだ…。とりあえず…前に進む!」

ネガティブな想像を頭の中から追い出し、俺は大声を出して気を引き締めると、キツ！と奥へと一直線に繋がる牢獄の道をにらみつけた。

深く息を吸つてから、一息に走り出す。

ダツ！と地面を蹴つて前へと進むと俺は牢獄の中へと足を踏み入れた。

左右を柱に挟まれた道はなだらかな傾斜になつており、少しづつ地下へと向かっている。

だが、一分ほど順調に走り続けていた俺だが、思わぬトラップに引っかかつてしまつた。

—
! ?

なだらかな傾斜だつたはずの道が急に深い段差に変化する。それ自体は単なる階段だつたのだが……ここでよく考えてみよつ。階段を下りるときに猛スピードで突つ込んでいつたらどうなるか。一段一段が低く、幅も広い階段ならば俺は駆け抜ける自信があつた。しかし、一段の高さが三十センチ弱。幅も同じ程度の階段で同じことをすれば?

結果は決まっている。
今の俺のように、転げ落ちるのみだ

体を丸めたために落下速度は大幅に増し、俺はノンストップで落下していく。

階段の横にあつた松明の明かりが無くなり、まぶた越しに闇を感じた直後、俺の体はボツチャーン！ と盛大に水の中へと突入した。

(水 ! ?)

パニックに陥りそうになるも意識を切り替え、手足を動かして水面に顔を出す。

中におぼろげな明かりが見えた。そう遠くはなぞうなので、平泳ぎで顔を水面に出しながら泳いでいく。

この時点で階段まで戻るという選択肢はなくなっていた。道は一本道で分かれ道などなかつたし、水中に入った時点でどこに階段があるのかもわからない。

泳いでいると、明かりがだんだんと近づいてきているのがわかった。コシン…と手の先に何か硬いものがぶつかる。どうやらそこからは陸地…ところのも妙な表現ではあるが、石の床のようなものが広がつていた。

「あの光はこの先だな…」

小さくつぶやいて俺は体を水から引き上げる。
びしおびしおの上着を脱いでからきつく絞り、ぽたぽたと水分を外に出すことで軽くした。それを羽織らずに腰に巻いてから俺は明かりのある方向に歩き出す。

トコトコと一分ほど歩くと、明かりの近くに到着した。明かりの正体は大きな燭台のようなもので、その上ではオレンジ色の炎が風に揺らされるとともに静かに光っている。

燭台とまわりを歩いておへゆのよひなものだ。

燭台の大きさは俺の背丈と同じくらいなので一メートルセセンチ。炎を足せばプラス四十センチといったところか。

俺は少し警戒心を強めながら燭台に触れてみる。

すると、ボツボツボツボツボツボツ！ と。目の前の燭台を起点にして円形に並べられていた燭台に規則的に火がついた。

一つだけじゃなかつたのかよ！ と叫びたくなる衝動にかられたが、それを何とか押さえ込んで、点灯された燭台を一つずつ田で追つていぐ。

円形に並べられている燭台の規模はそんなに大きくなさそうだ。燭台の数は二十本ほどで燭台同士の感覚は大体10メートル前後。そう結論付けようとした俺だが、燭台の裏で何かが光るのを見つけて眉をひそめる。

すべての燭台の裏、そこから鎖が円の中央に伸びていた。そしてその鎖は、炎の光を受けて金色に光る体毛を持つ獣の四肢を封じている。

獣の大きさは巨体と言い表すに十分で、一噛みで人の上半身を食いちぎれるだろう。

「…まさか…雷獅子…？」

つぶやいた直後、いや、そんなはずがないと俺は自分の考えを否定した。

雷獅子はこの世にいるはずがないのだ。
今まで魔獣使いと契約した神獣は三体。

三百年前に雷の神獣《雷獅子》^{らいじし} がニード・クレイグと。
二百年前に風の神獣《嵐鳥》^{あらじり} がロゼリア・フィードと。
五十年前に氷の神獣《氷狼》^{ひょうろう} がヴァレイグ・クロスと。

そして、嵐鳥は魔獣使いが死ぬのと同時に風となつて消えている。
雷獅子については、家に伝わる伝承で、ニード・クレイグが死ぬ前にどこかに消えたと伝えられているが、嵐鳥と同じように自分の司

る属性となつて消えたはずだ。

だが、その獣の姿は凄惨なまでに美しかつた。

炎の光で煌く鬚たてがみ

力強い彫刻のような筋肉

金色に輝く体毛

その全てが醸し出す神々しい雰囲気が、静かに横たわる獣が神獣であることを物語つていた。

ゴクリ…と口内に沸いてきたつばを飲み込んで、俺はゆっくりと獣に近づいていく。

円の中心にいる獣まであと半分といつといひで、今まで微動だにしなかつた獣が動きを見せた。

獣は頭を持ち上げ、俺のほうに顔を向ける。

俺の姿を確認すると、獣は重たそうに立ち上がった。獣の体を縛る鎖がジャラジャラと音を立てる。

獣の金色の瞳が俺を射抜いた。

そして、

『…お前…一ードか?』

「!?

獣が口を開き、声を発したことに俺は驚く。

魔獣使いと契約していない魔物は言葉による意思の疎通はできないはずなのだ。

いや、だがその前に。今あいつはなんと言つた? 俺は先ほど聞いた言葉が聞き間違いではないかと何度も記憶を反芻する。

だが、なんど思い返しても獣は俺の先祖の名を言つていた。
俺は驚きながらも獣に聞き返す。

「今……なんて言つた？」

『？ ……あア』

獣は怪訝そうな顔：といつも霧囲気をしたがすぐに得心が言つたかのように一度頷いた。

『ワリイな。あれから何年経つたのかは知らねえが、ニードはとつくに死んじまつてんだる。だから俺はここにいるんだからな』

「…よくわかんないんだけどよ…。ニード・クレイグは俺の先祖だぞ」

『先祖！ クハハハ、そーかそーか！ お前、ニードの生まれ変わ

りか！』

「…は？」

なにか今とんでもない言葉が聞こえた気がする。

俺が訝しげな視線を獣に向けると、獣は楽しそうに笑いながら言葉を続けた。

『その髪と目の色。おまけに顔までそっくりだ！』

「悪いんだが何を話してのかまつたく分からん」

『お前はニードの生まれ変わりってことだ。ゲートが牢獄ルーブルに開いたのがいい証拠だ』

「だから生まれ変わりとか言われても困るんだよ！ 俺が始まりの魔獸使いの生まれ変わりなわけない！」

『なんでだ？』

唐突に生まれ変わりと言われ、俺は頭に血が上るのが分かつた。

俺は落ちこぼれ。それに大して、目の前の獣が言つニード・クレイグは、最強にして、世界で一番最初の魔獸使いだ。

小さいころから見た目が似ている祖父と散々比べられてきた。その

せいで自分が落ちこぼれという印象はますます強まってきてる。その上、俺が初代の生まれ変わりだと? 俺は俺だ! 祖父と比べられてきたときと同じように、また勝手に期待されて勝手に失望されるのは嫌だ!

そんな思考が頭の中を埋め尽くしていく。

小さいころから比べられてきたせいで、一種の心的外傷ヒューリックのようなものが俺の中に出来上がってしまった。

俺は獣に食つて掛かる。

「何でだじやねえ! 俺は俺なんだよ! 大体なんでお前は俺と話せてんだ! ?」

『……なんで怒つてんだ?』

「ツ……! ……悪かった」

獣から聞こえてくる声は、心配げな色を含んでいた。
俺は自分が思つてゐるよりも激昂してゐることに気づいて心を静める。

『……何でオレと話せるか、だつたな?』

俺が落ち着いたことに安心したのか、獣はようしそうに俺に聞き返した。

俺は首を縦に動かして肯定の意を示す。
そして、

『オレが雷獅子で、お前はオレと契約してるからだ! 』

獸…もとて雷獅子は俺にとんでもない事実を突きつけてきた。

六話（後書き）

誤字脱字、感想などお待ちしております^ ^

『オレが雷獅子で、お前はオレと契約してるからだー。』

雷獅子のその言葉で、俺は逆に冷静になってしまった。

俺がもう魔獸…特に雷獅子と契約している? バカバカしい…。魔獸と契約するには、直接生氣を流し込むという動作が必要だ。そして、俺はそんなことをした覚えはない。そもそも雷獅子は死んでいるはずだしな。

フツ…と鼻で笑つて両手の手のひらを上に向け、胸の高さまで持ち上げてからゆらゆらと揺らす。「やれやれ」というジェスチャーだ。苦笑しながら、俺は雷獅子に問う。

「何か証拠はあるのか? あ、『オレが雷獅子』の部分と『お前はオレと契約している』の一いつについての証拠だ」

明らかに小馬鹿にしている俺の態度が気に食わなかつたのか、雷獅子は少しムツと した雰囲気を すると、口をガパリと開いた。赤い口内に、白い歯がズラリと並んでいる。何を言い出すのかと思つていた俺だが、その予想は見事に外れた。

雷獅子の口の奥が一瞬光る、と脳が認識した次の瞬間。

バヂイッ!! と、俺の右横一メートルあたりを何かレーザーのようなものが凄まじい速さで通り抜けていった。

ゴロゴロ…! と雷のよつな音が少し遅れて聞こえてくる。

恐る恐る振り返つて背後を確認してみると、俺が今立つている石のステージと水が貯められているプールの境目、その上空で激しくスパークする雷を水の盾が押しとどめているといつシユールな光景が見ることができた。

『クソ…と俺はのみを鳴らす。

『雷閃つ一つ技だ。これで俺が雷獅子つてのはわかつてもうえたか？』

「…ああ、それは納得した。…契約してゐるつてのは？」

勝ち誇るよつに顔を俺に向けた雷獅子にしづしづ頭を返すと、俺は次の証拠の提示を促した。
すると、雷獅子はなぜか言ことへんひく首をかしげる。

「どうかしたのか？」

『いや、いつこつ時は一ーじだつたら上手く説明できんだら一けど…』

「つまり証明できないと？」

『ち、ちげーよー！ ううー…！ あー！』

「『あ』？」

『お前、魔獸に絡まれねーだろ？』

「は？ 絡まれないつて…近付かれないつてことかー？」

聞き捨てならない台詞が雷獅子の口から飛び出してきたことに、俺は眉をひそめる。

俺が落ちこぼれと言われる最たる理由は、魔獸に嫌われること。つまり、魔獸は俺に一定距離以上近付かないのだ。

俺の食いつきぶりに、雷獅子は少々驚きながらも続きを話し始める。

『俺が契約してんのは一ードとお前の共通点『魂』とだ。『躯』は抜きにしてお前は半分だけオレと契約してゐる。曲がりなりにもこのオレ『最強の雷獅子』^{アストラ・リックス}の契約者なんだからそこの低位魔獸は逃げ出すはずだ。まあ、上位魔獸なら話は別かもしけねーけど』

がんがらがつしゃーん！　と俺の中で何かが盛大な音を立てて崩れていくのが分かつた。

「……じゃあなにか？　お前のせいで…俺は魔獣に嫌われ続けたってことか！！？」

『へ？　なんでそんなに怒つてんだよ？　近付けないのは低位魔獣だけだぞ？』

「怒つてるわけじゃない…。むしろ、嬉しい…かもしない」

低位魔獣？　魔獣には格付けのようなものがあったのか？　いやでも魔獣では強いつて言われる母親のフレイムキャットは逃げ出した。てことはあれは低位魔獣だつたってことか？　なら上位魔獣は？　俺がまともに触れ合ったことがあるのなんて祖父のブラックドラゴンくらいだが…？

いろいろな疑問が頭の中を掠めていくが、一つだけ確信したことがある。

俺は雷獅子と契約している！

そうとしか思えなかつた。いや、そう思いたかつた。

俺が悩み続けていた「落ちこぼれ」というレッテルの原因は、全て自分のせいだと思つていた。しかし、今は雷獅子と契約していたからという本当の理由を知れた。

今まで一人で抱え込んでいたものが、一気に解放された気分に、俺は自然と笑みをこぼす。

それに、雷獅子は神獣だ。じつと契約すれば落ちこぼれとは呼ばれなくなるだろ？。

「分かつた。納得したぜ雷獅子…」

『信じてくれたのか！？』

雷獅子が急に立ち上がり俺のほうに歩いてこようとする。しかし、雷獅子の四肢を封じている鎖はそれを許さなかつた。ジャラジャラと音を立てて雷獅子の歩みを止める。

それをもどかしそうな視線で眺めた雷獅子は、俺に視線を移した。

『あの人…、悪いんだけど『躯』の方の契約も済ませちゃくれねーか？この雷を吸収する鎖と周りの純粋な水のせいだ力がうまく使えねーんだ』

「ハッ！ …わかった」

笑う。ゆっくりと歩みを進めて雷獅子の側に近付いた。

「改めて…、俺はロスト・クレイグ。ロストって呼んでくれ『アストラ・リクス』『最強の雷獣』だ。リクでいい』

ピタ…と俺は雷獅子の皮膚に手を当てる。意識を集中させ、生氣を流し込んだ。

「よろしくな、リク」

『ヒーロー、ロスト』

俺の生氣を雷獅子…リクが取り込むと同時に、俺とリクをゲートの光が包み込むように覆つた。。

話（後書き）

今回は短めです汗

次はパートナーがめなので少し長くなるかもなのでその反動です>

<

俺がリクに生氣を流し込み、契約の儀を完遂させたことをゲートが察知。二人まとめてエニグマからエンティクスト学院に転送された。

行きと同じ白の世界からゲートを潜り抜けて講堂『大空』へと帰還する。

「つと……！」

少しバランスを崩したが無事着地。リクが出てくるはずの後ろを振り返りながら教師やクラスメート連中の反応を想像してしまつ。落ちこぼれと言っていた自分が神獣と契約できてしまつたのだ。しかも『雷獅子』という本当は死んでいたはずの伝説の魔獣と。ジャックやルイスなどは驚くだろうし、教師陣も俺への評価を変えざるを得ないだろう。

だが、そんな不純なことを考えながら振り返った先。そこには『雷獣の牢獄』で見たあの雄々しさと神々しさを兼ね備えた巨体はなく。代わりに俺の腰くらいの体高の、犬と猫を足した感じの動物がいた。

「…………」

毛の色は金、俺が契約した魔獣と同じ。そして一度は見たことがあるだろう、子供の獅子というのはまさに犬と猫を足したような顔の

造詣をしていいるのだ。

つまり、と俺は一つの可能性にたどり着く。

「…………もしかして……リクか……？」

俺に問い合わせられたそいつは少し首を斜めに傾げると、そもそもそれが当然であるという風に口を開く。

『何当たり前のこと言つてんだ?』

「うやうやしく予想は的中したらしい。声は少し高くなっているが間違いないくこの可愛らしい動物くんはリクである。だが、なぜだ？」

契約後に姿が変わるなんてこと授業でも習わなかつた。しばし熟考したあと、リクに聞くのが一番早いと思いつく。

「お前……なんで縮んでんの？」

『縮んでる？ セーいやなんかロストはでかくなつた気がするなー』
「ちげーよーー！ お前が縮んでんのーーー！」

なぜかとぼけた返事を返すリクに全力で突っ込むと、リクは不思議そうに俺を見た後、講堂の鏡のように磨き上げられた壁を 正確にはそれに写つた俺と自分 見て、納得したよつに頷く。

『あア、この姿になんのも久しぶりだな。……三百年ぶりぐらいか？』

『三百年？ どういうことだ？』

『よーするにな？ こっちの世界でオレが完全体だとロストの生氣をすぐに吸い尽くしちまつて危ねーんだよ。無意識に吸つてる分だけでもすぐだな。干からびて死ぬ』

「干からびてーー？」

物騒な言葉にびびる俺をよそに、リクは言葉を続ける。

『生気が枯渇すると命を削つて新しい生気を生み出しかまう。だからでかいままだとロストの負担がテケーからこの幼生みてーに生気の消費が低いバージョンになるってことだ。ま、少ない命の量からどれだけ多くの生気を精製できるかが上位より上のランクの魔獸を使うコツだ、……ってニードが言つてた』

「受け売りかよ……」

…神獸と契約していくというのは思つたより大変らしい。リクが最後に言つていた命から生気を効率よく創り出すつてのは場数踏んでいけばできるようになるのだろうか。できればそうであつて欲しい。だが、リクが小さくなってしまったとしても懸念がもう一つある。

『魔獸外装』のことだ。

何しろ伝説の魔獸使いが使つていた武器なのだ。一振りで俺の全生氣を消費とかなら燃費悪すぎとしか言いようがない。

「あのよ、リク」

『なんだ?』

「魔じゅ 「おおおう!! クレイグ!! 無事に契約の儀を終えることができたのかあ!!」」

今、俺が一番気にしている疑問を解消しようとしているところに野太い声で邪魔をしてきたのは、筋肉の鎧を纏つたゴリラ型の魔獸：じやなくてジルマス。

魔獸と見紛うばかりのその教師はがつしりと俺の肩をホールドして賞賛の言葉を浴びせてくる。

「見直したぞ!! まさか実技があそこまでできなかつたお前が、

今回、一番田の早さで契約を完遂させるとほ……」

「一番田？」

『なんだこの暑苦しーのは』

「おう！ 一番田だ…… 今年のパートナーは順番で決めることにしたからなあ…… トップで終わらせたやつはすでに待ち合わせ場所を俺に渡して向かっていったぞ……」

「待ち合わせ場所ってどこですか？」

『つーかうるさいなコイツ。消し炭にしてやるーか』

ジルマスの説明の間に、俺の足元で失礼なことを言いまくるリクだが、契約した魔獸使い以外にその言葉は聞こえない。

ジルマスはごそごそと腰のベルトポーチから紙を取り出すと俺に差し出してきた。

「 魔獸使いギルドエンティクスト支部 ？」

紙片にはそう書かれているのみだった。どこかで見覚えのある字だつたが脳内検索で見つからなかつたので保留。

そしてこれはどういう意味なんだろうか。

「お前のパートナーがここに来いと言つていたぞ……」

そういうことか。どのみちパートナー決めをしたらペアで魔獸使いギルドに登録しなければならないのだ。そこでギルドに自分と魔獸の名前を登録してはじめて単位がもらつためのクエストを受けられる。

俺はジルマスに浅くお辞儀してから、リクと共に講堂を出た。

廊下を歩いて、学院の出入り口近くにあるギルド支部へと向かいながら、隣を歩くリクに話しかける。

「あのや…、なんでリクは死なかつたんだ?」

『どーゆー意味だ?』

「いや…、魔獸使いが死んだら魔獸も死ぬ。それなのになんで生きてるのか不思議だつたんだ」

『…一ードのおかげかな。アイツが死ぬ直前にオレをエーブルマに連れてつてくれたんだ。んで、向こうで一度死んだ』

「死んだ? でもお前がいなくなつてからも一ードは生きてたって家の伝承には残つてるけど…』

『オレは雷を司る神獸だぜ? 心臓が止まつたくらいなら雷の力を注ぎ込んでしばらく動かし続けるくらいはできる』

「ふーん…。あ、お前のことなんて登録すればいいんだ? 『雷獅子』はもう死んだことになつてんだからまずいだろ?』

『マズいかどうかなんてオレが知るかー!』

ガブツ! ヒリクは俺の脚に噛み付いてくる。だが、あまり力を入れていたわけではないらしく、少し足を振ると簡単に振りほどけた。

「何すんだ!」

『考えるのは好きじゃねーんだよ!-!』

リクに吼えられながら歩いていると、エンティクスト学院に設置されている魔獸使いギルド支部の入り口が見えてきた。

エンティクスト学院の大部分を構成しているのは白い大理石で、その全てに魔獸によつて『硬化』の魔法がかけられている。

余談だが、魔法使いが使う魔法と魔獸が使う魔法に特に変わりはない。違うとすれば、魔法使いは多様な魔法を広く浅く習得し、魔獸は一種類の魔法を狭く深く習得するということか。

大理石で作られている学園とは違い、ギルド支部は全て木造だ。しかし、樹齢千年を超える神木で増築したらしいので今後五百年は朽ちることがないそうだ。

そんな素材でできた木の扉を押し開けて、中に足を踏み入れる。ギルドに入るのは一度授業で見学したとき以来だが、ここはまったく変わつていなかつた。

広さは五十人が入る教室を六セット並べたくらい。

向かつて右側の壁はクエストの依頼書がずらりと貼られ、左の壁側にはクエストに必要なポーションや地図、魔法生物ルキアの主な生息地の分布図などが売られていた。

奥には依頼書を提出、または完了報告をするためのカウンターとさまざまな手続き　単位を計算したりギルドへの登録　をする力ウンターが並べて二つ置かれ、そこでは美人のギルド嬢がニコニコしながら依頼されるのを待つてゐる。

そして、そんなギルド支部にいくつか置かれたテーブルに一人の女が座つてゐた。その横では何か白い物体が丸くなつてゐる。あの女の魔獸だろうか。

俺に背を向けて座つてゐるそいつが、おそらくは俺のパートナー。といふか今年はペア決めが適當すぎると思う。去年は成績を綿密に照らし合わせてやつていたはずだ。

内心で愚痴をこぼしながら、俺は自分のパートナーであるそいつに近付いていこうとする。

しかし、

「…？　どうかしたのか？　リク」

リクはなぜか立ち止まり、スンスンと鼻で何かの匂いを嗅いでいるようだった。

木の匂いが珍しいのかもしれないが、まるで犬のよつで少し面白い。

『……なんか……どつかで嗅いだことのある匂いが……』

「三百年エニグマにいたやつが何言つてんだよ。いいから行くぞ?」

『……何だっけなあ……この匂い』

まだ何か言つているリクを連れて、俺はその女の側へと近付いていった。

俺の足跡が聞こえたのか、女が立ち上がり振り返る。

「……………あ……………！」

「……………ツ……………！」

俺とその女の目が合つた。

俺は驚いて声を上げ、女はアメジスト色の瞳を見開いて顔に驚きの色を浮かべる。

そう。俺のパートナーであるうその女は、何の因果か神の気まぐれか、『氷姫』セレン・アルジエその人だった。

「……………」「……………」

俺とアルジエは一人して黙りこくつたままだ。

まさかあのアルジエとペアが一緒になると思わなかつた。図書館で『トートを貸す』という恥ずかしいあのエピソードだつて今後はかかわることが無いと思ってやつたことだつたのに。しかし、このまま沈黙していくも埒があかない。

何から切り出そうかと悩んでいると、ズボンのポケットに入れてお

いた紙片が乾いた音を立てた。

俺はこれ幸いとばかりにポケットから紙片を取り出すと、それをアルジエに突きつける。

「なあ、これ書いてジルマスに渡したの…お前か？ アルジエ」

俺が目の前に突き出した紙片をまじまじと観察し、アルジエはゆっくりと首を立てて振った。

「間違いない。これは私が書いたもの。これをどこで拾ったの？」

「拾つてねえよ…！ お前はトップで合格したんだろう？ 俺は一番目だったから自動的に俺とお前がペアになつたんだ」

「…本当？」

「本当だ。嘘つくな必要なんてないだろ…」

なかなか信じよつとしないアルジエに、俺はため息をつく。
だが、これから一年間はコイツと組んで単位を稼いでいかないといけないので。ここで波風を立てても仕方ないだろう。
俺はアルジエの反対側まで歩いていくと、椅子をひいて腰掛けた。

「ま、これから一年間協力してやつていくんだからよろしくな？」

アルジエ

「…苗字で呼ばれるのは好きじゃないの。セレンでいい」

「…わかった。よろしく、セレン」

「…よろしく。…早速だけどギルドに登録しようと思つから、この

記入用紙に自分の名前と魔獣の種類を書いて」

スッ…と、アルジエ…もといセレンが俺に羊皮紙と羽ペンとインクを差し出してくれる。

それを受け取ると俺のまだ空白の記入欄の横、セレンの記入欄にサ

ツと田を通した。

「うーーー」

「…どうかした？」

「いや…なんでもない」

俺はセレンの記入欄に書かれていた内容に少し驚くが、すぐに気を取り直して羽ペンを手に取る。

(…契約魔獣…ホワイトドラゴンかよ…！　てことはアイツの足元で丸くなってる毛玉みたいなのがホワイトドラゴンか…)

どうりで俺が近付いても逃げ出していかないはずだ。

しかし、ドラゴン系と契約できる魔獣使いがまだいたのか…。ヒ、神獣と契約している自分を棚においてセレンの実力にあきれ返る俺。羊皮紙に「名前：ロスト・クレイグ」と書いた後、「契約魔獣：」の欄で手を止める。

隠していても仕方ないと思うが、公にすれば好奇の視線にさらされるのは間違いないだろう。

「なあ、リク。お前のことなんて登録すりゃいい？」

『くんくん…。ア？ 雷獅子じゃダメなのか？』

「…それでいいか」

まだ何かの匂いを嗅いでいるリクの許可を取つて、俺は「契約魔獣：雷獅子」と書き込んだ。何度も羊皮紙を振つてインクを乾かした後、それをセレンに渡す。

「これでいいか？」

セレンは羊皮紙を見て一瞬だけ眉をひそめると、視線をテーブルの下で匂いを嗅いでいるリクに移す。

何回か羊皮紙とリクとで視線を移していたセレンだが、無言で席を立つとカウンターへ羊皮紙を持っていってしまった。

そのセレンの後をホワイトドリーパンがぱたぱたと翼を動かして追いつがる。

「ハッタリだと思われたのか…？」

まあ、普通の人間ならば雷獅子が生きていると聞いても信じないだろう。

俺も自分の真横を『雷閃』？とかいう技が通過するまで信じられなかつたからな。

その時、リクが何かを思い出したかのように声を上げた。

『あアツ…！　思い出した…！』

「…なにを？」

『この匂いだよ…！』

「まったく何の匂いもしないんだが…」

『あの白竜と一緒に女からして匂いだ！』

テーブルに肘をついて話半分に聞いていた俺だが、横で伏せていたはずのリクがテーブルに飛び乗ってきたので少し驚く。

「…なんの匂いだって？」

『あの女の匂い…どこかで嗅いだことがあると思つたらあの女と同じ匂いを三百年前に嗅いだ…！』

そこでリクは一度言葉を切つて俺とセレンを交互に見やると、とん

でもないことを言った。

魔力の匂いだ！あの女、魔法使いの匂いがする
！！

「セレンが魔法使い？」

リクのその言葉を、俺はオウムのように繰り返す。笑い飛ばしてしまおうと一瞬だけ考えたが、俺の頭の中で何かがパズルのピースのようにすつきりとハマつていくのがわかつた。

セレンのあだ名である『氷姫』。だがそれはなぜつけられたのか。誰ともかかわるうとせず、常に一人でいることからつけられた。ならばなぜいつも一人でいるのだ？

もちろん、一人が好き。という可能性もある。しかし、セレンが魔法使いであると考えてみると一つの仮説が浮かび上がるのだ。

いつも、一人でいたかったのではなく、一人でいるしかなかつた。

実技筆記の成績が常にトップのセレン・アルジエだつて、ただの人だ。

誰かといふ時間が長ければ長いほどボロは出やすくなる。それが親しい友人などならばその可能性はさらにあがる。

しかも、セレンが隠しているだらう秘密は『魔法使い』というとんでもないものなのだ。

それがどうしたと思う人もいるかもしれないが、それはごく一部。魔獣使いと魔法使いの戦争『聖戦』以前の歴史では、魔獣使いになる前の人たちは魔法使いに奴隸のように使われてきた。

おかげで初期の魔獣使いたちの間で、「魔法使ひは皆殺しにするべし」という雰囲気が作り上げられ、それは三百年の時を経た今でも

大多数の人間の心中に強く根付いている。

そんな中で自分が魔法使ひなどと知られたら、即座にエンティクストにいる魔獣使ひ150人を筆頭に、ルミティア中の魔獣使ひから命を狙われることになるだろう。

「なあリク。本当に、間違いなくセレンは魔法使ひなんだな？」

『本當だ！ エニグマ以外で嗅ぐ魔力の匂いなんて魔法使ひの魔力しかないだろ！』

「…同意を求めるように見つめてくるのはやめてくれ。信じてるから」

『本當か！？』

「ああ、信じてる。けど、その前にいくつか聞いてもいいか？」

『いいぞー！ なんだ？』

セレンが魔法使ひだと事実にはほんの些細な矛盾があつた。

その疑問をどうやって解決するかを考えると、リクに聞くのが一番早い。リクは俺の隣に座りながら小首をかしげた。

「魔法使ひは三百年前に滅びたんじゃないのか？」

『いいや、あん時に全員死んでたわけじゃない。二ードが何十人か逃がしてた』

「…逃がした？ 二ード・クレイグが？ マジで？」

思わぬところで史実にも乗つていないことを聞き、頭の中に疑問符がいくつか浮かぶ。

自分の先祖がそんなことをしていたなんて全く知らなかつた。歴史上ではあまり活躍する役ではない二ード・クレイグにも、色々と事情があつたのかもしない。

しかし、新しい疑問符も浮かぶ中で、最初から抱えていた疑問の一つが解消された。

「つてことはニード・クレイグが助けた魔法使いの中の一人がセレンの先祖か…」

珍しい因果もあるものだ、と素直に感心してしまつ。当時逃がした側と逃がされた側の血筋が三百年の時を越えて今度は助け合う…もとい助け合わなきやいけない　いや、一人だと卒業できないんだつたクエスト受けられないから　関係になつたわけだ。

「うーん…まあお前は行儀が悪いから降りろ」

リクを抱きかかえて床に降ろ　やつぱりやめて、隣の椅子の上にちょこんと座らせる。

カウンターではまだセレンがギルド登録の手続きをしているのを確認してから、リクと額をつき合わせて内緒話モード。

「もう一つ質問。魔力の匂いがしたからつて魔法使いとは限らないんじゃないか？　もし親が魔法使いであることを隠してれば、セレンは魔力を持つているだけで、魔法使いじやないつてことになる」「それはねーと思うぞ？　ニードと魔法使いの隠れ里？　つてどこに行つたときに気づいたんだが、まだ魔法の使えねえ子供と魔法の使える大人じや匂いが違つたぜ』

「じゃあセレンは『魔法の使える』匂いだったつてことか？　わざわざお前が『あの女は魔法使い』って言い切つたくらいだし

言いながら、俺はリクの頭の毛をクシャツと撫でる。ふさふさとしたそれを撫でてやると、リクは気持ちよさそうに目を

細めた。

「ま、俺は無宗教だし、大昔に奴隸にされてたからって魔法使いを殺したいとは思わない。三百年も経てば十分だろ？ わざわざ殺し合ひの歴史を続けることもない」

『…………』

笑い混じつに笑いつと、リクが無言で俺の顔を見つめてくる。

「…どうした？」

首をかしげると、リクはどこか懐かしそうに言った。

『…一ードに似てるなって思つた』

「へえ…。どこら辺が？」

『大物っぽいところ』

「ははっ！ ありがと。…『落ちこぼれ』から…『大物』。……」

『どうしたんだ？』

リクの褒め言葉に笑つていた俺だが、自分の印象も変わるもんだな…と感慨深げに呟く。

しかし、呟いた後に黙り込む俺を不審に思つたのか、さつきの俺のようになりクが声をかけてきた。

「『大物』…ねえ。…一ード・クレイグなら、こんな時にどう行動するんだろうか…って思つたんだよ」

『？ 難しいことはよくわかんねえけど、一ードは『皆が笑えるようにする』って言つてたぜ？』

パートナーが魔法使いだってわかつてしまつたらどうするか。俺の

その疑問に、頼れる神獣はさらつと答えてくれた。

『皆が笑えるようにする』。そのフレーズが、頭の中でなんどもりフレインする。

「そういや、あいつが笑つてるとこころなんて見たことねーな……。
『皆が笑えるようにする』……か」

『氷姫』セレン・アルジェが笑わない理由。

それは、自分が魔法使いだつてことを誰にも教えずに、徹底的に秘密にしているから。ボロを出さないために人と関わらない。つまり、少しも笑わずキツイ態度をとり続けることで、自分から人を遠ざけているのだ。

しかし、人と関われないというのは案外、ストレスが溜まるものなのである。

俺だつて実技で「D」をとり続けて落ち込んだときに、ルイスに愚痴をこぼすことでストレスを発散していた。

両極端ではあるが、トップを取り続けるといつのも相当なストレスの原因だろう。

だが、これから単位を得るために受けるクエストといつのはストレスを溜めたままでは危険なのだ。『おい？ ロスト？ ビーしたんだ？』

魔獣への生氣の譲渡にしろ、魔獣外装の扱いにしろ、どちらも集中力が高ければ高いほど成功しやすくなり、逆に集中力が保てない風邪を引いていたり、怪我してしたりする と生氣を渡すスピードが遅くなつたり、魔獣外装の失敗^{ファンブル}が起きやすくなつたりする。学院の授業とは違い、クエストを受けて魔法生物『ルキア』を倒すというのは命がけなのだ。

一分一秒を争う状況で、ずっとストレスを溜めていたから手元狂つ

て死にました　なんてことになつたら死んでも死に切れない。』
返事くらゐしるーーー!』

だからセレンにはストレスを適度に発散させる手伝いをしてくれる
『友』が必要なのだ。

俺にとつてのルイスのように。

だがその『友』には絶対に欠かせない条件が一つあるのだ！

と、とりあえずここまで長つたらしく説明を続けてきた訳だが、俺
は　というより俺の心　はセレンの笑顔を見てみたいらしい。

その欠かせない条件とは、セレンが魔法使いであることを知つてい
て、なおかつセレンに心を許してもらつこと。

一つ目の条件に当てはまる奴は少ないだらう、つていうか多分俺だ
け。ならば俺がセレンの『友』になる他ない。

…セレンに死なれちゃ困るつてだけだからな？　他意はない。

頭の片隅で言い訳をして、俺は頭を動かし始めた。

『友』になるためのハードルはいくつかあるが、それを巧く超える
ためのアイディアは…つと。

「思いついた」

『さつきから何回も呼んでんだけど…?』

「え？　あ、わりいわりい！　ちょっと考えないとしてて」

少しお怒り気味のリクをなだめていると、足跡と羽音が近付いてく
るのがわかつた。セレンとホワイトドラゴンだらう。
首だけ後ろに向けて、俺はセレンの姿を確認すると、俺は椅子から
立ち上がった。

「登録終わったのか？」

俺の問いに、セレンの首が小さく縦に動いた。

それを確かめてから、俺は先ほど思いついたアイデアの下、「しらえをする。

「なあ、セレン。ちょっと魔獣外装の確認とかしたいし、『大地』に行かないか?」

『大地』というのは、何代か前の学院長が丸一年かけて創り上げた特別修練室のことである。毎年、契約の儀を終えた魔獣使いたちはそこで自分の魔獣外装の性能を試すのだ。

俺がどうしてそこを選んだのかとすると、さすがに学院長が魔獣の力を使って創った修練室なだけあって各部屋の中は完全防音。一度入つたら中から開けないと出てこれない。

中でどれだけ暴れても外にはまったく影響がない。

このせいでいくつかの部屋は入れなくなっているが、大事な話をするには最適なのだ。

「だめか?」

セレンはふるふると首を振った。金髪が光を受けてシルクのようにな煌く。

そして一言。

「わかった」

セレンに了承の返事を得た後、俺たちはギルド支部から特別修練室『大地』へと移動した。

ここでもセレンに話しかけてはみたものの、そつなく返されるだけだったので話し相手をリクに変える。

「リク。俺は筆記のほうで十番以下に落ちたことがないんだけどさ、上のほうにあがつたこともねーんだよ」

リクにだけ聞こえるような小声で話す。だが、リクからの反応はなし、つまんなやうな話は無視することにしたのだろう。

「その理由はわかってんだ。いつも勉強してる途中で、テスト範囲以外の勉強しちゃうんだよ」

例えば、

「人の心についての勉強…とかね」

『人の心?』

「そうさ、だから今から、セレンと仲良くなつてやる。作戦名『心の壁をぶつ壊せ』だ」

にやりと笑つて、俺は少し早く歩き始めた。

受付の名簿に名前を書いてから部屋番号の鍵をかりると、俺とセレンは修練室に入していく。

中に入るのは初めてだったが、普通の更地を周囲が壁で覆っているだけだった。

セレンはホワイトドリームーンを呼び寄せると、

「それじゃ、魔獣外装を呼び出して『その前にひょっとこいか?』なに?」

セレンの言葉をさえぎって俺は言ふ。

作戦『心の壁をぶつ壊せ』の第一段階。

怪訝そうにするセレンに大きな爆弾を。

「お前、魔法使いだろ」

二話（前書き）

えと、二話と二話別バージョンの合体版です^_^

二話と二話別バージョンを読んでいない方は前書きはスルーしても
らつて大丈夫です汗

「お前、魔法使いだろ」
「ツーーー?」

俺がそう言つと、セレンは一瞬硬直して、弾けたようにサイドステップで移動する。

その移動した先には ホワイトドラゴンが。
ホワイトドラゴンも向かつてくる主の意図を察したのか、ぐるりと空中で背中を向ける。

セレンは素早くその背に右手を当て、当てた右手が淡く発光した。
そして叫ぶ。己の魔獣から、力を借りるための言葉を。

「『魔獣外装』……」
「……話を聞けって」
「………………！」

まあ、予想していなかつたことではない。予想していなかつたわけではないが、普段は冷静沈着に見えるあの『氷姫』がいきなり襲い掛かってくるとは思わなかつたのだ。

魔獣使いが同類に対して魔獣外装を呼び出すのは殺し合ひの始まり。しかし、俺はそのセレンの行動に違和感を覚えた。

リクの言つよう魔獣使いであるならば、最初から魔法で攻撃してくれればいいのではないだろうか。それをしない理由とは?

内心でそんなことを考えていたが、とりあえず応戦しないわけにはいかないだろう。

いきなり戦闘になつたときに周囲に被害が出ないように『大地』を選びはしたが、よくよく考えてみると、ここで死んだ人は外に出られないで（一緒に入つたものに死体を運んでもらわない限り）殺されてもわからないということになる。

殺した側は、死んだ奴の魔獣外装^{ファンブル}が失敗して暴走した。と言つておけば無罪放免だ。もちろん殺す気も殺される気もないが、相手が魔獣外装を使つているのだから俺も使うべきだろう。

傍らのリクの背に手を当てて、口の中の生氣の流れを把握。それを抽出して手の平からリクへと流し込む。

「リク！　『魔獣外装^{アーマメンテ}』ツ！」

『魔法使いと殺し合いすんのは…三百年ぶりだなア！　受け取れ口スト、オレの魔獣外装^{タケミカツチ}『健御雷神^{タケミカツチ}』だ！！』

リクが興奮したように吼える。

リクの体から光が粒子となつて溢れ出し、それは俺の手で一本の刀に変わつた。

柄は白、鍔は刃と同じ白銀で、六十センチ強の刃の上には金で紋様が彫られている。

完全な雷獅子だつたりクにも感じた、凄惨なまでの神々しさを持つた刀、銘は『健御雷神^{タケミカツチ}』。

俺が魔獣外装を展開したのと同じように、セレンも魔獣外装を展開していた。

セレンの魔獣外装、形状は…槍。色は純白、長さは一メートルほど。これは授業で見たことがある。ホワイトドラゴン固有の魔獣外装『ブリューナク』だ。

確か、能力は

「シッ！」

質量を持つた光を生み出すこと。

セレンはブリューナクの能力を応用して、光の矢を放つ。

俺は反射的に右に体を捻つて回避した。

ステップを踏みながら小刻みに動いて照準を定められないようにする。

『心の壁をぶつ壊せ』第一段階は、セレンに落ち着いてもひつじ。

俺は第一段階すでにセレンが魔法使いであることをしつていてバラしている。それは、パートナーとしてこれからつまく連携をとつていく仲良くするために一番の問題は、セレンが魔法使いであることを隠しているという事実だからだ。

だから最初に隠している事実を知つていると打ち明けることで、鉄壁のような心理的障壁を無理やり崩した。

あとは、俺に敵意がないことをわかつてもひつだけ。それを達成するために『なるべく怪我をさせない』ように勝つて戦意を喪失させる』という条件が必要になつてくるわけだ。

動きながら、俺は側で同じように動いているリクに声をかける。

「リク！ この健御雷神タケミカツチってどんな技が使える？」

『どんな技？ 雷撃の塊みてーなのを飛ばしたり、刀身から雷撃つたりするくれーだ』

「威力は？ つと…！」

『…撃つ弾数によって違うぜ。さつき口ストが俺に渡した生氣を全部使えばあの女くらい消し飛ばせる』

「消し飛ばしちゃ駄目なんだよ…。威力の調節は？」

セレンから何発か光の矢が放たれるが、それをよけながら話を続ける。

『そー言われても…、刀ン中にある力を感じて、一発ずつ調節して撃つべきやいいんじやねーの?』

「…リク、雷閃つてのは使えないのか?」

『あれ使つたらあの女が塵になる代わりにロストも死ぬぞ』

「…やっぱいいや」

死ぬのはごめんだし、殺すのもだめだ。

俺はセレンのほうにも意識を向けながら、タケミカツチ健御雷神の中に入つてい
るはずの己の生氣を確認する。

これが!

とりあえず全て撃てば人を消し炭にするという話なので、その百分の一を刃に纏わせる。

チチチチッ! と小さくスパークして、刀身の上を火花が走った。
それを振りかぶると、

「フッ!」

気勢を呼氣として吐き出しながら、一息に腕を振った。
だが、セレンは光で盾を開いてそれを防ぐ。

魔獣外装を使うのは初めてなはずなのに上位魔獣の強化外装を使いこなすとはなんという応用力だろう。と、自分のことは棚に上げて感心していると、セレンが大きく槍を掲げ、回転させながら振り下ろした。そのブリューナクから放たれた光の矢は…三本。
今までとは比較にならない速度で飛ばしていく。

「やべ……！」

サイドステップで回避しようとしたが、足が滑ってしまつ。そして、その光の矢はそのまま俺の胸を

《何やつてんだ！》

貫かなかつた。リクがとひきに俺の脚を引っ張つてくれたおかげで、ギリギリ避けることに成功。

「わふわふー！」

短く礼を言つて、慌てて体勢を立て直す。しかし、セレンは追い討ちをかけるように何本も光の矢を撃つてきた。命からがら地面を転がつてそれを避け、さつきの五倍の量の生気を使って雷を放つ。

今度は雷の斬撃を飛ばすのではなく、自然の雷のよつな一条の雷槍を。ノーモーションで放たれたそれは、セレンの肩を掠めた。

「ツ……！」

セレンの端正な顔が痛みで歪む。

体が雷によつて意思とは関係なくビクつと震え、一瞬だけ身体の自由が利かなくなつたはずだ。

その隙を見逃さずにダッシュでセレンに近付いていく。

「来ないで！」

セレンは叫ぶと、ブリューナクを振つて光の矢を五本一度に撃つ。しかし、今度は俺もバランスを崩してはいない。なまじ質量を持つ

ただけに、矢の速度は光速どころか雷速にすら及ばないのだ。

残っている生氣のほとんどを消費して、俺にヒットする軌道上にあつた右端の一一本を健御雷神^{タケミカツチ}で叩き落し、左足で地面を蹴つて右に飛んでから、再びセレンの元へ。

『！ ロスト！ 避けるッ！』

「は？ ガツ…ぐアツ！？」

ボンッ！ となんの前触れもなく、俺の背後で爆炎^{カツチ}が上がった。爆風と衝撃波で背中を焼かれ、俺は苦悶の声を漏らす。

「今…、何が…？」

つい口から呑^{ウム}惑いの言葉が出るが、言つてから俺は気づく。

(魔法…か！ 今まで使わずにブリューナクだけだったのは、そこから目をさりさせるためのフェイク…！？)

驚愕^{ハラハラ}すると同時に、セレンの戦略の立て方に戦慄する。

セレンは間違いなく天才だ。相手が誰であれ、新米の魔獣使いであれば負けることはないだろう。相手が俺でなければ…だが。俺は地面に倒れた姿勢から、雷を身体に纏わせ雷速でセレンの背後に移動する。

たかが光の矢を一本叩き落すためだけに、生氣のほとんどを使うわけがない。纖細な操作も可能にする超高性能な健御雷神^{タケミカツチ}やろうとも思わなかつたアイディアだが…、今回は魔獣外装の性能に助けられたな。

セレンの首筋に健御雷神^{タケミカツチ}を押し当てて俺は言った。

「俺の勝ちだな……。落ち着いて話さひざせっ」

五分後

俺は向かい合ひ位置に座っているセレンに声をかけた。

「確認するけど、やっぱ魔法使いなんだよな？」

「……どこで知ったの？」

冷静なセレンが言い間違えそうになるとは。
少し驚くが、俺はリクを抱きかかえてセレンの前に突き出す。

「セレンが魔法使いだってのは俺の魔獣『雷獅子』のリクに聞いた。
何でもセレンから魔法使いの匂いがしたんだとか。でも、俺は別に
セレンが魔法使いだからって殺そつとは思っていない」

「……魔力の匂い？」

「ああ、魔力の匂いだ。三百年前に嗅いだ匂いと一緒なんだと」

腕が疲れてきたのでリクを地面に下ろしてから、セレンに歩み寄る。

「ま、今更否定しても遅いけどな。さつきの爆炎……魔法だろ？」

「…………」

黙りこくるセレンに、俺はゆっくりと近付いていく。
刺激しないために、ゆっくり、ゆっくりと…。

俺は歩いていき、少し手を伸ばせばセレンに触れられるだろう位置まで近付いてから言った。

「俺を信じてくれないか？」

「え…？」

「俺はお前のパートナーだ。お前が魔法使いであることをバラすなんてことはしないし、それをネタに強請るようなこともしない。絶対だ！」

真っ直ぐにアメジストの瞳を見つめて、一言一言ゆっくりと話す。セレンに考える時間を『』るためにわざと遅く話したのだが、それは成功だったようだ。
迷うように何度も視線を泳がせた後、セレンは俺の瞳を真っ直ぐに見据える。

「…どうやってあなたを信じればいいの？　あなたが裏切つ「殺せばいい」」

『大地』での最初の会話のように、俺はセレンの言葉をさえぎった。

「殺せばいい。俺はパートナーを裏切るようなまねは絶対にしない

「…………」

よし、手ごたえありだ。

セレンは瞳を大きく見開いている。これは相手の話に興味を持ったという感情の表れらしい。

ここで一気に畳み掛ける！

「もう一度言ひやっ。俺を信じてくれないか？ セレン」

俺にそう言われて、セレンの息遣いが少し早くなつた。

ツ…と、俺の背中に冷や汗が流れる。ここで信じてもらえなければ、どちらかが大怪我するまでまた殺し合にすることになりそうだ。

「…………」

『大地』を静寂が覆いつ。

リクも空気を読んで静かにしているし、ホワイトドラゴンも地面上に降りて心配そぞこセレンを見ている。

そして、

「条件がある

「…ああ、何でも言つてくれ！」

成功か！？ でも条件つてなに言われんだろ！？

内心ビクビクしながらも、笑顔でセレンに返答する俺。 そんな俺にセレンは指を突きつけた。

「魔法をかけさせて…あなたが裏切れないようにする魔法」

「おう。いいぜ」

「…本当に？ 裏切れば死ぬ魔法だけど」

「死ツ！？ ああ、いいぜ。俺は絶対に裏切らないから」

物騒な言葉に驚きはしたが、笑みを浮かべて肯定する。するとセレンは拍子抜けしたように、

「…そんな便利な魔法はないわ」

と言った。

魔法使いとはいって、何でも出来るというわけではなさそうだ。
俺がセレンの言葉に安堵している　もちろん裏切る気はないが
と、セレンが口を開いた。

「一つ聞いてもいい?」

「なに?」

「私に何をさせたいの?　わざわざ私が魔法使いだって言わなくて
も問題はなかつたはず」

「『何をさせたいの?』って言われても…。強いて言えば、これから
一年近く協力することになるパートナーなんだから、仲良く出来
ればなーとか思つてんだけど…」

「…なにが言いたいの?」

俺が頭を捻りながら出した答えに、セレンは意味がわからないとい
つた風な顔をしてくれやがった。

「あー、ほら、セレンって笑わないだろ?　ストレス溜まつてそう
だし」

「…さつきの続きをしたいの?」

「んなわけないだろ!　話は最後まで聞いてくれ!」

さつきの続きを魔法を使って殺していくということだろう。俺は
それを全力で否定してから、フォローの後の補足説明を始めた。
ま、さつき頭の中でまとめた考えをそのまま話すだけだが。

「『笑わない理由』。なんでかなーとは思つてたけど、セレンが人
を寄せ付けないのは魔法使いだってボロを出さないためだろ?」

「間違つてはない…けど」

「だから人と一緒にいない。口を滑らせる可能性が高くなるからな……」

そうだ。でも、俺は、俺だけはそれを知ってる。

「こつともつまんなさやーにしてるお前に笑ってほしかったんだ。俺に出来る」とならなんでもする」

だから、と俺は言葉を続けた。

「俺のパートナーになってくれないか？隠し事なんかしないで、いつも笑って一緒にいられるような…運命の相手に」

邪な気持ちなど何も無い、俺の心からの頼み。それを聞いたセレンはといつと、

「…………」

なぜか下を向いてしまった。

「……………」

俺が問うのと同時に、ボト…と地面に透明な何かが煌きながら落ちていった。

セレンが顔を上ると、その頬には涙のあとがある。

「……うん…お礼をいつのは一度田だけ…ありがと…」

そう言って、セレンは笑顔を浮かべる。

俺が始めて見たセレンの笑顔は、どんな芸術品よりも美しかった。

さながら、氷姫の万年雪を溶かす、暖かな春の日差しのようだ

。

二話（後書き）

えりと投票ありがとうございました！

最終的には

「1」46票

「2」9票

ところ結果になつたのですが、2に投票していくださつた方たちの意見も反映させたいと思いまして書いてみました！
そうしたらこうこう形に落ち着いた訳ですが…

どうでしょ？

感想いただけすると嬉しいです^ ^

あ、これのつゝ後、二話と別バージョンは申し訳ありませんが消させて頂くことにします^ ^
ほんとにすみません^ ^；

男子寮・自室にて

今、俺はつづぶせになつて背中に薬を塗られながら、どんでもないものを見ている。

セレン・アルジエは見た目は本当に美人だし、声も可愛いという部類に入るだろ？

しかし、素のアルジエは…ヤバイ。

え？ 何でヤバイって？

それは 。

「そりゃ本當にめんなさい！ 魔法使いだつてバレたら殺されるかもしけないって思つたら、先に殺すしかない！ って思つちやつて…」

「あ、ああ。 そなんだ」

《コイシ… こんななんだつたつけ？》

リクが心底不思議そうな声を出すのも無理はないと思つ。

俺だつて今日の前で展開されている光景が夢ではないかと疑つている。

なぜなら、俺の部屋では今メイド服を着たセレンが俺の世話を焼く、という異常事態が発生しているからだ。

「友達になつてくれ」と言つて心を許してもらえたまでは良かつた

が、セレンの魔法のおかげで背中に軽い火傷をした俺が「背中痛いから今日は帰らせて」といったところ。

セレン「火傷^{それ}…私のせいだよね…？」

俺「え？　いや、ほつときや治るよ。心配すんな」

セレン「ううん…パートナーの私が看病しなくちゃ！」

セレンは学院で働いているメイドから無理やり服を奪った後に俺をベッドに叩き込んだのが『大地』から帰ってきた後の事の顛末である。

氷姫バージョンを一年続けてきた反動なのか、心を許せる相手ができたのがうれしかったかはわからないが。口調変わってるし、心配そうに俺の背中の傷に薬塗るとか反則でしょう。可愛すぎる。

素のセレンと氷姫のときのセレンのギャップが凄まじいのも可愛いと思つ要因の一つだ。

「痛くない…？」

俺の背中に軟膏を刷り込みながら、セレンは心配そうに言つ。

少し散らかっていた俺の部屋もソッコーで片付けてくれて、いまでは整理整頓されたきれいな部屋になっている。

そして、俺は部屋のベッドの上でセレンに薬を塗つてもうっているのだが。

「大丈夫だつて、痛くない」

「…ほんと？」

痛みよりも別の意味で限界が近くなってきた。

だってセレンみたいな超絶美少女と一人つきりで、しかも自室で、

あの細い白魚のような指が背中の上を這に這つて回るのだ。

「私…、あなたのこと知つてたんだよ?」

自分の中の煩惱と凄まじいバトルを繰り広げていると、唐突にセレンが口を開いた。

「どうしたことだ?」「聞き返そつかとも思つたが俺が反応するより早く、セレンが続きを話し始める。

「だつて…実技であんなに失敗する人なんて始めて見たもん

「…そつちか

目に見えて落ち込む俺に、セレンは焦つたように言葉を付け足した。

「あ、あと、『コード貸してくれてありがとう』。背中のどこの『ク

レイグ』って縫つてなかつたらわからなかつたかもだけど」

「え? あれ名前書いてあつたのか…? つーかよくそんなの見つけたな…」

「ふえ…! ? ち、違つよ別に『コード』を調べたりなんかしてないからねつ…?」

「別に疑つたわけじゃ…」

「え? …もう…! …ばか

「ブツ! げほげほげほ!」

咳き込んだ。

駄目だ。可愛すぎんだろこいつ…。

俺とセレンがそんなコントをしていのうち、リクはセレンのホワイトドラゴン、シルヴィアと意気投合したらしく、二人(=四?)で仲良く遊んでいた。

「…薬、塗り終わったよ？」

「おう、さんきゅー」

薬を塗り終わったと言われ、俺が上着を着た直後。シルヴィアが一声「きゅーいっ！」と鳴いた。

「…」

それを聞いたセレンはどこ近くのクローゼットのドアを開けると、俺の黒のロングコートを引っ張り出してそれを羽織る。いきなり何を始めたのかと俺が怪訝に思うのと同時に、

「ロストーーー」「ロスト君ーーー」

「「あめでとーーー！」」「

ばーん！　ヒノックもなしにドアを乱暴に開け放つて入ってきたのは、ジャックとルイスだった。

俺はうんざりしながらその一人に言葉を投げかける。

「何しにきたんだ？　お前、」「

「うわ！　その言い草はねーだろ？　せつかく魔獣と契約できたって聞いたから祝いに来てやつたのに」「

「あのね？　僕とジャック君がペアになつたんだよ？」「

「へー。魔獣は？」

「お前を怖がるだらうから部屋に置いてきたぜーーーってあれ？　なんでアルジエさんがロストの部屋に？」

今頃気付いたらしく、俺の部屋にいたセレンを見て、目を丸くするジャック。

ルイスは空氣を読んだのか、ぴくっと眉を動かしただけだ。

「何か問題あるの？」

いえ！」

うわあ、切り替え早いなセレンさん。すっかり氷姫モードだよ。氷姫の絶対零度の視線に射すくめられ、ジャックは本気でビビつている。まあ、でもセレンの着てるコートの下はメイド服なんだけど

ジャックが知つたら卒倒するだろ。

すっかりセレンに威圧されたジャックが少しかわいそうになつてき
たので説明してやる。

「セ…じゃなくて、アルジエが俺のパートナーなんだよ」

俺の告白にジャックは目を丸くし、ルイスはなぜか笑顔だ。セレンは不機嫌そうにも見える無表情で黙っている。

ジャックは口をパクパクと開閉させていたが、やがて何か思い出し

たかのように声を発した。

卷之三

絶叫したあと、猛スピードで俺の部屋から飛び出していった。

「『めんねロスト君！』お祝いはまた今度みんなでやるーねー！」

と、ルイスもジャックを追いかけていつてしまつた。

ふう……とため息をついてからセレンをみると、ビビが不機嫌そうである。

何怒りせてんだあのアホ！ と心のなかでジャックに悪口を言こながら、不機嫌そうなセレンに話しかけた。

「悪いな…。アホだけど、悪気があつてしゃがむわけじゃないんだ」

あまりジャックをフォローする気もなかつたので、悪口をださながら言訳する。

しかし、

「違うの…」

「違う？」

意外にも、セレンは首を横に振った。
少し俯きながらも、必殺の上田遣いで見つめてくる。

「セレンって呼んでほしい…」

「はい？」

「だから……お前で……呼んで？」

あ、わかった。そういうえば苗字で呼ばれるのは嫌いつて言ってたつだけ。

それにしても数々「セレン、セレン、セレン」。多分これが素のセレンなんだろうけど。

内心で納得したり苦笑したりしていたが、それよりもセレンの態度の変わりよつに相変わらず驚く。

ノーマルモードが俺専用で氷姫モードがその他（ジャックとかライス）用か。

嬉しい気もしないではないが……うーむ。

これは、嬉しい悲鳴とこいつやつか。

「わかった。セレン。でも、今日はもう寝るから良いか？
クエスト受けに行きたいから……十時にギルドの中でな

「うん！ わかった！」

名前で呼ばれた途端に笑顔になるセレン。
そして、部屋から出て行こうとして、

「あ、回復魔法使つておくれね？」

背中の火傷は跡形もなく治る。

セレンはシルヴィアと一緒に部屋を出て行った。

……使えるなら最初から使えよ。

心の底からそり悪ひ俺であった。

このヤレンヒツコヒ感想いただけると嬉しいです…^ ^ ;

トレスガな戻もわるので…

「ふわあ」

「眠そうだね？ 口スト君」

セレンといい友達になれた翌日。
パートナー

食堂で大あくびをしている最中に話しかけられ、俺は首を後ろに向ける。

「おう、ルイス。ちょっとな…」

まあ眠れなかつた理由は読んでなかつた本を読んでいたからなんだ
けど。

…決してセレンのせいとかじゃないぞ？ ジョント夢でセレンが笑
いながら殺しに来る夢を見ただけだ。

「ふうん…。あ、僕の魔獣を紹介するね？ ゼロウルフの口キだよ
「ゼロウルフ？」

聞いたことのない魔獣の名前だった。
どんな魔獣なんだろう。そう思つて、ルイスが手招きする延長線上
に視線を向ける。

「おお、かつこいいな」

鋭い目つきに細身ながらも筋肉のついた身体。体格の大きさも完全
体のリクの半分くらいだ。見た目は
ぶつちやけ、温和そうなルイスとは正反対の見た目だった。
狼。

俺のそばで肉を貪っていたリクは一瞬だけゼロウルフ 口キを見

据えた後、そのままガツガツと肉を食い続いている。ロキは俺のすぐそばにいるルイスの横に近づいたといつのこと逃げだす様子はない。つてことは上位魔獸か。

「本当に？ 嬉しいなあ。契約するのは簡単だつたんだけど、探すのが大変だつたんだよね」

「？ わざわざ探しに行つたのか？」

「うん。どうしてもロキと契約したかつたから

「へー。珍しいな」

などと飯を食いながら話を続けていたが、

「あ、もういんな時間じやん」

時計を見ると九時四十分を指していた。セレンンとはギルド支部で十時に待ち合わせの予定なので、そろそろ行かなーとまずいだひつ。

「ルイス、俺そろそろ行くわ。お前もジャックと一緒に苦労が耐えないとどうけど、がんばれよー。んじやな。…いくぞリク

「うん、がんばってねー！」

まだ巨大な肉をがつついでいるリクの背中を叩くと、俺はルイスに別れを告げた。

リクは俺の頭ほどある肉の塊を未練がましくわえて俺についてくる。

「あとでまた食わせてやるから置いてけよ……」

その食い意地の悪さに半ば呆れて声をかける。
しかしリクは首を振つて、

『「つるせー！ これはオレが食つ！ …ちよつと生氣よこせー。』

「生氣？」

肉をくわえているために口ではモ「ンモ「ン」と言つてゐるが、意味は通じるところが魔獸使いと魔獸の便利なところだな。トリクの背中に手を当てて生氣を少しだけ流し込む。

「何やんの？」

『焼肉』

「は？」

渡した生氣で何をするのか気になつたので聞いてみたところ、一言で答えが返つてきた。

思いもよらないその答えについて立ち止まつてしまつ。すると、バヂヂヂヂッ！！！！ トリクの口からスパーク音が聞こえる。

リクの肉から白煙が立ち上り、どんどん色が変わつていく。三十秒ほどですっかり香ばしい匂いを放つ焼肉が誕生した。

「お前…まさか雷で肉を焼いたのか？」

『そうだぞ？』

「なんて無駄な能力の使い方なんだ…」

仮にも神獸の能力を肉を焼くために使うなよ…。と言いたくなつたが、苦笑いしながら先を促す。

「ほら、さつさと行くぞ？」

俺はギルド支部のドアを脚開けて中に入った。

結局、リクは瞬く間に肉を平らげて今は満足げに顔を緩ませている。

「あ、セレン」

時間は九時五十分。

まだ少し早いかと思ったが、セレンはすでに依頼書の貼り付ける壁の前でクエストを物色していた。

昨日のバトルでも思ったが、セレンの実力は相当に高い。魔法を抜きにしても今のエンティクストで右に出るものは少ないだろう。俺も魔獣外装の性能で勝つたようなものだし。

なので、それなりの単位が取れるクエストでも問題はないと思つ。

俺が近付くと、シルヴィアが鳴く。

「おはよう」

セレンが振り向いたので挨拶をした。

俺を見て、一瞬だけ笑顔を浮かべそうになつたセレンだが、すぐに氷姫の無表情に戻る。

「おはよー、… 口… クレイグ君」

「んー。なんか良さそうなクエストあった?」

クエストを見ていた風だったので聞いてみると、案の定セレンは三つの依頼書を指差した。

「あれ?」

セレンが頷いたのでそれを見てみる。

小型ルキア『リトルレオ』十五体討伐	取得単位3
中型ルキア『ミドルノア』二体討伐	取得単位6
大型ルキア『レックス』一体討伐	取得単位12

依頼書には倒すルキアの名称と、それを達成することで得られる単位しか書かれていない。

詳しい説明はカウンターに持っていくことで受け取ったギルド嬢が教えてくれる。

確かに卒業までに必要な単位は300だ。小型ルキアを討伐して貰える単位は大体3。そして、クエストは一回受ければ一日休まなければいけないので、小型ルキアを討伐するクエストばかり受けているも一百日で卒業できる。

だが、俺とセレンならばもっと早く卒業して、一人前の魔獣使いになれるだろう。

ならば、まずは中型ルキアの討伐を選んでみるか。と俺は考える。これで苦戦するよつながらぬもう少し慣れるまで小型ルキアを討伐していくのもいいし。と、いうことで。

「ミドルノア倒すやつにしないか？」

大型ルキアであるレックスは防御力が異様に高い。

まだ魔獣と契約したばかりの魔獣使いでは倒すのに苦労するだろう。とは言つても小型ルキアのリトルレオは十五体倒しても単位が3しかもらえない。

ならば間を取つてミドルノアを選んだわけだが、セレンも同じ考え方だつたようで、すぐに同意してくれた。

俺は壁からミドルノア討伐の依頼書をはがし、それをカウンターまで持つていく。

セレンとともにカウンターの前に備え付けられている椅子に腰を下ろして、俺はギルド嬢に依頼書を手渡し、

「すいません。説明お願ひします
「はい！ かしこまりました！」

黄色い詰襟の制服を着たギルド嬢は、元気の良い返事を返してくれた。

依頼書を一瞥すると、カウンターの後ろの棚から一枚の紙を取り出して、カウンターの上に置く。

それを指差しながら解説を始めるギルド嬢。

「ミドルノア一体の討伐ですね？ これはルミティア近辺からの依頼ではなくロメドス公国からのものですのでご了承ください！ 移動手段としまして大陸間移動ゲートを使用いたしますので、ロメドス公国の魔獣使いギルドから、ミドルノアの巣へ向かっていただきます！」

ギルド支部が何よりもまず研究したことは、大陸間の移動を容易に

する移動方法の開発である。

エニグマのように別世界に行くゲートは聖都ルミティアと、ルミティアに並ぶ大国であるカミド国にしかないが、大陸間を移動する転送ゲートは各国のギルド支部に設置されている。

「ミドルノアの巣は、ロメドス公国首都の正門を出てから一時間ほど東に歩いたところにあります！ そして、討伐証明としてミドルノアの虹色尾羽を一本持つて帰つてきます！ それでよろしければ、ギルドカードを提示してください！」

「ギルドカード？」

「私が持つてる」

二人一組で活動するため、ギルドカードは一枚しか配られない。

セレンは「グリフォン・セレンアルジェ・ロストクレイグ」と刻まれた白色のそれをギルド嬢に差し出した。

ギルド嬢はカードを受け取ると、カウンターに置いてあつた水晶球に押し当てる。水晶球は一瞬だけ発光して、すぐに透明に戻る。ギルド嬢は笑顔を浮かべながら、セレンにカードを返してお辞儀した。

「それでは、初めてのクエスト。成功されますようお祈りしております！」

「どもっす

…………（ペリフ）「

俺はそれに礼を言つてから、セレンは無言で会釈してから、リクとシルヴィアについてくるように声をかけ、ギルド支部のカウンターの奥につながる扉へと向かつた。

その途中、

「あ、ロスト君とアルジエさん。今からクエスト？」

ルイスが声をかけてきた。
だが、一緒にいるのはロキだけで、ジャックの姿が見当たらない。
クエストを受けに来たわけではなさそうだ。

「どうしたんだ？」

聞くと、ルイスは困ったように笑った。

「ジャック君がどのクエスト受けるのか迷いすぎて結局決まってないんだ…。良かつたらどんなの受けるか教えてくれない？」
「やっぱりジャックはアホだな…俺らはミドルノアを倒しにロメドスに行くとこだよ」

「ミドルノア！？ 今日受けに行くって事はクエストは初めてでしょ？ 中型を相手にするのに魔獣外装の確認とか終わったの？」

……普通は驚くよな、いきなり中型のルキアを倒すって言われたら。俺は頭をかいてルイスの肩に手を置いた。

「昨日試したんだよ。んじゃ、そろそろ行かないとセレンが怒りそうだから」「あ、ごめんね？ 引き止めちゃって…。アルジエさんもすいません」

「…べつにいい」

リクとシルヴィアを回収して俺とセレンはゲートのある部屋に入つていいく。

一人残されたルイスはポツリと呟いた。

「『セレンが怒りそうだから』…か。名前で呼んでるんだ…」

五話（後書き）

一応言つておきますが、B-L要素は入っていませんへへ；
感想、誤字脱字、表現のおかしいところなど、教えてくださいなうといつ
れしいです！

光の筒のような形状をした大陸間移動ゲートから、俺とセレンとリクとシルヴィアはロメドス公国に降り立つた。

ロメドス王国は魔法世界レグニアの南方にある国で、温暖な気候とナババという黄色く細長い果物が特徴の国だ。

ゲートの側の長机に座っているギルド嬢 ロメドス支部の制服は青だった に話しかける。

「すいません、ルミティアから来ました。ロスト・クレイグとセレン・アルジェです」

俺はそう言ってから、ギルドカードを持つセレンに振り返る。セレンも頷いて、ギルド嬢にカードを渡した。

ギルド嬢はそれを受け取って、手元の水晶球に当てる。この動作はゲートを使う前の規則らしい。ルミティアのほうでもゲートのある部屋で行われた流れだ。

「ロメドスにようこと。連絡は水晶球を通じて受けています。ギルドカードに入国許可を出しておきますので出入国の際、守衛にご提示ください」「わかりました」

返されたギルドカードをセレンに渡して、俺たちはギルド支部のゲートの部屋から、依頼書やクエストに必要なものが売っている部屋

に移動する。

俺は売店を一瞥してからセレンに聞いてみた。

「なんか必要なもんとかあるか？ あつたら買っておくけど
「え…？ 必要なもの…？」

一応周囲には何人か人影が見えるので氷姫モードなのだろう。
俺は首をかしげたセレンに、売店を見ながら答えた。

「うん。回復用の魔法が込められた回復結晶とか」

回復用の魔法といつても、昨日俺の火傷を治してくれたようなセレンの魔法ではなく、回復の魔獣外装を使って造られた水晶のことだ。
少し値は張るが、持つていれば心強いものである。

「…持っていたほうが良いかもしれないけど…」

「じゃあ買つー」

『飯も買つてくれー！』

「わかったわかった」

「…？ どうしたの？」

横からリクが口を挟んできたので軽くあしらってから売店へ向かおうとする。だが、セレンはどこか心配げな雰囲気だ。
それに疑問を感じた俺は、

素直にセレンに質問することにした。
すると、氷姫モードでは珍しい少し慌てたような感じでセレンは言う。

「あの…お金とか…」

「金は大丈夫なのかってこと?」

セレンは頷く。

俺はあまり気にしてなかつた問題なので、セレンが心配してくれたことにどこか違和感を感じてしまった。

エンティクストではあまり関係ないことなので皆忘れているのかもしないが、俺の実家であるクレイグ家は名家だ。落ちこぼれと言われていても仕送りくらいはもらつていろ。

「大丈夫だよ。財布持つてきたし」

中身はすべて世界全土で使用可能なルミティア金貨だ。

エンティクストでは金を使わなくとも生活できるので、ほぼ手をつければ残している財布の中には、およそ100枚以上は入っているだろう。

ちなみにルミティア金貨四枚で、平民の四人家族が一年暮らしひける額だ。

皮の財布袋から金貨を取り出してセレンに見せると、セレンは目を丸くして金貨を見た。

「ほんとこどうかしたの?」

「……お金持ちなんだ…」

少し悔しそうにしているセレンを見ていると、俺はその表情の理由を気付いてしまった。

貧乏なのだ。

学費の高いエンティクストだが、実技か筆記でトップを取った生徒には奨学金が出ている。しかし、それは一つあわせて学費のほとんどに飛んでいき、贅沢しなければ金が少しだけ余るというレベル

だ。

しかも魔法使いであることを隠すために生活しているなら、家にもあまりお金はないだろ？。

「……家柄は良いからな……。セレンもなんか必要なものがあったら言つてくれ。おじるから」

「…………む」

セレンはむくれてしまつた。

「本当に金は余ってるからいいんだけどなー。と思ってながら、俺は売店のおばちゃんに話しかけた（じうごうひりのみなせか必ずおばちゃんがいる）。

「おばちゃん！ 回復結晶^{ヒールクリスタル}と…。セレン、他に必要なものとかある？」

「…………地図」

「…………の地図もくだれーーー。あ、回復結晶^{ヒールクリスタル}は四つねーーー。」

「あいよー。ええと、回復結晶はひとつ銀貨二十枚で地図は銅貨十枚だから…銀貨八十枚と銅貨十枚ねー！」

貨幣のレートは銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚だ。

俺は財布から金貨一枚取り出して、おばちゃんに渡す。

「はーい。おつりはいらぬよ」

「…………」

「ひつーー？ ち、違うぞセレンー。金持ちアピールとかじゃないか

「…………」

背後から凄まじい視線を感じて、言い訳をしてしまつ俺。いや、勘違いしないでほし。本当に金持ちアピールじゃないから。

「わかつたよー一気前のいい兄ちゃん！ 名前はなんてんだい？ 知りたいことがあつたら何でも聞いとくれ！」

こういう売店では情報を扱うことも多いのだ。
それをジャックに聞いたことがあつたから実行したのだが、どうやら本当のことだつたらじ。

「名前はロスト。今は特にないけど、知りたいことがあつたら聞くことにするよ」

「そうかい！ それじゃあ氣をつけて！」

「ん。わかつた」

おばひやんに手を振つてからセレンの方を恐る恐る見てみると、少しは落ち着いたようだつた。

それに安堵しながら、俺はセレンに回復結晶を一つ渡さうとする。

「…………嫌味？」

「そんなんじやないよー！」

表面上は落ち着いたように見えたセレンだが、まだ怒つていたらしい。

氷姫の視線がブリザードのヒールクリスタルになつてきただので、腰を低くしながら回復結晶を献上した。

「受け取つてくれませんか？ だつてほりセレンも持つといってくれたら俺が結晶使えないような怪我したときに助けてもらえるでしょ？」

必死の言い訳が功を奏したのか、セレンはそれを受け取つてくれた。

ふう…とため息を付く俺に、リクが不満をひた話しかけてくる。

『なー！ オレの飯は？』

「さつき食べただろ？ … クエストが終わったら買つてやるよ」

しかし、よく考えてみたらミドルノアの巣は歩いて一時間のところにあるらしいので、昼飯は必要だらう。

もう一度売店のおばちゃんに声をかける。

「おばちゃん。昼飯用の携帯食料とかない？」

「あるよー。」

おばちゃんは売店の棚から銀色の袋をいくつか取り出して俺の前においた。

「こへりっ。」

財布を取り出して聞いたが、おばちゃんは笑顔で首を横に振った。

「さつき沢山買つてくれたからね。これはサービスだよー。」

「ありがとうございます！」

なんか得した気分になるが、携帯食料ひとつとさつきの釣りではぜんぜん釣り合わない。

文句を言つ氣もないが。

俺は携帯食料を受け取ると、半分をセレンに渡した。今度は素直に受け取つてもらえたので、俺は安心しながら残りの四本を制服のポケットに納める。

『オレは今食いたい！』

「…そうすると昼飯抜きだぞ？」

『…なんか仕留める！』

「そんなもんに使う生氣はない。我慢しろ」

『うがー！』

やかましくリクが吼えるが、それをスルーしてセレンの顔を見る。

「んじゃ、行くか」

「…わかつた」

いまだにお怒り気味の氷姫だった。

魔獣使いギルドロメドス支部を出て、俺とセレンはロメドスの町を歩いていた。

地面は舗装されてはいないが平らな道で、大通りには様々な出店が活気よく宣伝をしている。

リクは食べ物に目移りしているようだが、俺はロメドスに来たらいつも食べているものを探して歩く。

一応は出口を目指して歩いているのだが、その途中で目的のものを売っている店を見つけ、セレンに断つてから店の主人に声をかけた。

「セレン、ちょっとあれ買つてくれる… すいません… ナババを二つくださいー」

そり、俺が食べたかったのはロメドスの特産品であるナババだ。店主に銅貨四枚といわれて財布を開けるが、金貨しかなかつたので仕方なくそれを差し出す。しかし、

「金貨！？ すまんなあんちやん、お釣りがないよ…」

「ええ！？」

「…………これで」

俺がうろたえた声を出すと、セレンが後ろから手の上に銅貨を乗せて差し出してくれた。

「それなら大丈夫だよ… あんちやんは綺麗な上に気が利く彼女さんがいるんだねえ！」

「ブツ！」

「…………（ぱつ）」

俺は店主の言葉を聞いて吹き出したが、セレンは無言で頬を赤らめただけだった。

…なぜだ？

もやもやした疑問を心中に抱きながらも、ナババを食べ終えた俺とセレンは、ロメドス公国の大門へと辿り着いた。門は開いていたが、すぐそこには守衛がいたので声をかけてみる。

「すいません、クエストで少し外に出たいのですが

「ん。いーよー。いきなー」

なんともやる気のなさげな守衛は、セレンの持つギルドカードをチラリと一瞥し、すぐに許可を出してくれた。俺は門の外に出てから首を傾げる。

「…あれって守衛の意味あんのかな？」

六話（後書き）

誤字脱字の報告お願いします^ ^

あと感想を書いてもらえたたら更新スピードが速くなったりします^ ^

<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9452y/>

最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

2011年12月25日12時55分発行